

ジゴクノ  
モンバン

阿門 遊

## 第一章 地獄の一丁目

---

ここは地獄の一丁目。地獄の門が聳え立つ。固く閉ざされた門の前に、二人の鬼が自分の身の丈ほどもある金棒を持って、直立不動で立っていた。

「なあ、青鬼どん」

「なんや、赤鬼どん」

「最近、ようけの人間がこの門を通りますなあ」

「ほんまや、おかげで、ここんところ毎日、二四時間交代制で、見張りせなあかんがな。おかげで、最近寝不足気味や。あ一眠た、さっきから、あくびばかりしてしゃあないがな」

「年は、小さい奴から、若いんを過ぎて、年寄りまで。肌の色は、白いんから、黄色を経て、黒いんまで、ほんまにようけ通りますな」

「ほんまに、ほんまや。最近は、中年いう世代かいな、若うもないし、年寄りでもない、中途半端の年の奴らが、特に多いわ。年齢だけでなく、生き方まで中途半端やったんやろか、背中丸めて、こそこそ歩きよる。生きとったとき、あんまり楽しいんなかったんやろか？」

「そうですねあ、まるで、地獄へ行くようなおどおどした顔の奴らばかりでっせ」

「何いうとんや。わしら、地獄の門番やで。ここ通る奴らは、みんな、地獄行きや」

「ほなけど、青鬼どん。あんた、地獄の中を見たことありまっか？」

「それや、それや、それやがな、赤鬼どん。恥ずかしい話やけどな、実は、わしは、かれこれ何十年も地獄の門番やってるけど、地獄の中は見たことないんや。わしら、青鬼一族は、先祖代々、地獄の門番の専門職やさかい、よっぽどのことがない限りこの門の中に入ることはないんや。地獄の話を知ろうと思っても、門で声かけた人間どもは誰も戻ってこんさかい、中のことはわからへん」

「それは、わたしら赤鬼一族も一緒にっせ。先祖代々、門番の仕事を仰せつかって、毎日一所懸命地獄の門を開けたりー、閉めたりー、閉めたりー、開けたりー、同じことの繰り返しばかりでっせ。いや、いや、何もこの仕事に不平不満があるわけではありまへんで。地獄に落ちてきた人間どもを地獄の中に放り込むんは、それはそれで大事な仕事やと思うし、気心の知れ、昔馴染みの青鬼どんとこうして一緒に門番の仕事できることは楽しいことや。そやけど、こうも毎日、毎日、同じことの繰り返しやとなんぼわしら鬼かて、ちょっとはいろんなこと考えますわ」

「そりゃ、そうや。わしも門番の仕事がいややちゅうわけではないけど、せっかく鬼として生まれてきた以上、全部とは言わんがせめて半分、いや十分の一、いや百分の一ぐらい地獄のことを知りたいんは、鬼の情ちゅうもんや。わしらだけでなく、この地獄で働く鬼たちも同じこと考えとんのと違うか」

「いや、いや、そんなこと考えとんは、わたしらだけやと思いまっせ、青鬼どん。みんな、毎日の生活に追い回されて、そんなこと考える暇がないんか、それとも考えることをやめてしまったんか、元から思いもつかんのか、そのうちのどれかでっしゃろ。足元ばかり見て、遠い彼方の大事なことで心が回らんと違いまっか」

「そうやなあ、心が回らんと目が回って地獄に落ちてくるんかいな」

「うまいこと言いますけど、わたしらは、すでに地獄におりませ」

その時、ピー、ピー、ピーという笛の音とともに、おっちら、こっちらという掛け声に合わせて、電車ごっこの一団がやってきた。

「ここは地獄の一丁目、一丁目。さあ、みんな着きましたでちゅよ。ここが到着駅の地獄の門でちゅ。運転手は僕だ、乗客はみんな。みんなはここで降りまちゅよ。さあさあ、降りてくださいね。急いで、降りて、怪我をしないから、ゆっくりでいいでちゅよ」

運転手役の鬼が振り向いて、着いてきた後ろの人間たちに向かって声を掛けている。しかし、一行が到着したにも関わらず、相変わらず話を続けている赤鬼と青鬼。たまりかねた運転手の鬼が大声をあげる。

「何、さっきから話してんでちゅか。いや、何話してんのや、赤鬼どんに、青鬼どん。さっさと、この門を開けてくだささい。いやいや、開けてえなあ。ほら、今日も、閻魔さまの命令で、百人もの人間どもを連れてきたんや、まさに一個連隊やで」

「これは、これは黄鬼どんやおまへんか。気いつかなんだがな。すんまへんな。こりゃまた、今回も、ぎょうさんの地獄行きの間人を連れてきましたなあ。それにしても、ええ大人が子供の電車ごっこかいな。しゃべり方まで赤ちゃん言葉になってまっせ。電車もそうやけど、あんたの船、こんなにたくさん人間が乗りますのかいな」

「乗るも乗らんも、閻魔さまの命令やさかい、しょうがないやおまへんか。一人でもこの世の岸に残したらあかんのや。待っとる奴は、みんな、船に押しこんむんや。三途の川を無事渡ったら、そのまま陸に引きあげて、閻魔さまの前に座らし、閻魔さまのご裁定の後、極楽へ行く奴は桃鬼どんが道案内して、地獄に行く奴はわしが引き連れてきたんや。それにこれは子供の遊びやおまへんで。生きとったとき、ろくなことしとらんやった奴らやから、途中で逃げ出したりせんように、催眠術で子供の頃に戻しとんのや。この電車から降りた途端、ちゃんと元の大人に戻るんや。ほんまは、戻らんほうがええのかも知れんけどな。今から、地獄の怖いお仕置きが待ってるやさかい。まあ、それまでは、わしも電車の運転手や。こいつらに合わせて、赤ちゃん言葉しゃべってんねん。サービス、サービス。わしは、サービスのプロやからな。こら、どこへ行っとるんや、そこのガキ、いや、そこの坊ちゃん、そっちへ降りたらだめ、だめでちゅよ。ほんま、こいつら、ほっといたら自分勝手な行動ばかりや。やっぱり、子供の頃に戻しても、言うこと聞かんがな。生まれたときから、地獄行きの性格なんやろか。そんなんやったら、元々、地獄で生まれたらよかったんや。わしがいちいちここまで連れて込んでもよかったのに。それにしても、ああ、しんど。たまには、わしも、桃鬼どんみたいに極楽へ行ってみたいわ。あっちは、たったの二、三人ぼっちやで。それに較べてわし一人で、こんだけぎょうさんの人間をここまで連れてこなあかんのや。地獄も最近赤字続きやさかい、人件費節約で、わし一人のワンマン電車になってしもうたんや」

「極楽へ行く奴は、そんなにちょっとの数でっか」

「よう聞いてくれた、赤鬼どん。そんだけ、最近悪いことする奴がようけ増えたちゅうことや。それとも、ええことする奴がおらんようになったことだけのことかも知れん。まあ、どっちにしろ、連れて行くのが、ようけの人数でも、少ない人数でも、給料が一緒では、割が合わんわ。

近頃、耳にする能力給制度や実績主義やないけど、もうちょっと、仕事の量で判断して欲しいわ  
」

「ほんま、黄鬼どんは、よう働きますな」

「わしもそない思うとる。このままずっと働き続けたら過労死や。死んだもんの面倒を見る奴が、死んでしもうたら洒落にならんがな」

「気いつけなあきまへんで。自分の体は自分が一番知っとるさかい。疲れたら、休まなあきまへん。計画的に、年休はとらなあきまへんで」

「休みを取りとうても、わしの代わりの奴がおらんから、取らへんのや。こないに、地獄に来る奴が多いんやったら、地獄も週休二日にしてもらわな、わしの体が持たんがな」

「ほな、閻魔様に、提言を兼ねて手紙でも書きまっか」

「黄鬼どんと赤鬼どんの話に割り込むようやけど」

頭をひねりながら青鬼がしゃべる。

「なんや、青鬼どん」

「わしら、鬼たちは死んだらどこへ行くやろか」

「そなん、極楽に決まってまっせ。青鬼どん」

赤鬼が胸をはって答える。

「そうかいな。わしら、ずっと生きとるさかい、あんまり死ぬこと考えてないけど、人間を懲らしめとるんには間違いないやろ。やっぱり地獄と違うんかいな」

「何いうてますねん。わたしら悪いことをした人間を懲らしめとんでっせ。ええことしとんに間違いないですわ。それに、死んで地獄に行くんやったら、今と同じや。死んだ意味があらしません」

「そりゃそうやなあ。ほんでも死ぬことに意味があるんかいな」

「そりゃあ、あるんと違いまっか。死んだらすべてが終わるまっせ」

「そりゃ、生きとる時のことが終わるだけで、死んだら死んだで、死んだ後の世界が待っとなと違うんか」

「なんや、頭がこんがらがってしまいそうですな。つまり、死んでも、地獄が待っとなということですか。ほんだら、わたしらまた、門番せなあきまへんな」

「何を訳のわからんこと言うてんのや、赤鬼どんに、青鬼どん。わしは忙しいから、早いところいつらあんたらに預けて、また、船着場に戻らなあかんのや。さっさと、その地獄の門、開けてえなあ」

「すまん、すまん、黄鬼どん。今すぐ開けるさかい。なんや、その網にかかるとる人間たちは」  
「こいつらか。さっき来る途中、わしが目を離し取ったら、船から三途の川に落ち込んだ奴らや。そのままにしといたら溺れてあの世に戻ってしまいよるさかい、急いで網で拾い上げたんや。網から出すんが、面倒くさいよって、そのままにしとんのや。ほんま、大変やで。船を漕ぎながら、人間救いもせなあかん。一人で何役もせなあかんのや。ほら、お前ら、さっさと、網から出んかい」

黄鬼が網を振り回すと、ふぎゃーと言いながら、生きていたときは救われなかった者たちが落

ちてきた。

「ひい、ふう。みい、よう、九十八と、網から落ちてきた二人足して百。ほな、確かに、今回は、百人連れてきたよって、わしは電車に乗って船着場に戻るで。まだ、次から次へと人間が向こう岸で待っとるさかい。はよ戻らな、相棒の桃鬼どんに怒られるわ。ほな、後は任せたで、青鬼どんに、赤鬼どん。また、来るで、さいなら」

黄鬼どんはそう言い残すと、電車のひもをひきずりながら、ひとりで帰っていった。後に残されたのは、ひも電車から降り、元の大人に戻った地獄への一行総勢百人。

「おい、お前たち。今から、この地獄の門を開けるよって、ちゃんと並んで入るんやで。列乱しよったら、お仕置きがまっとるで」

地獄へ来たら、どうせ全部お仕置きやと文句を言う人間たち。

「何、ぶつぶつ、言うてんねん。地獄に来てから仏さんに助けてもらおうと頼んだかてもう遅いで。それは、生きとるときに、ええ行いして、頼むもんや。さっさと入れ。地獄の試練がお待ちかねや」

赤鬼と青鬼は地獄の門を開き、金棒を振り回しはじめた。人間たちは、何て乱暴な鬼や、地獄には人権がないのかと怒りながら、ぞろぞろと門の中に入っていく。

## 第二章 二人の男

---

「さあ、みんな入ったな。門を閉めましょか、青鬼どん」

「そうやな、赤鬼どん。ん、待てよ、そこの地面に人間がふたり倒れてるで」

「さっき、黄鬼どんが網から放り出した奴らや。おい、そこの二人、さっきと立ち上がらんかいな。地獄の門を閉めてしまおうで」

それでも二人は地面に転がったまま動こうとしない。

「す、すいません。わたしは、さっき船から落ちて、三途の川の水をたくさん飲んでしまい、お腹が満杯で、動けないのです。溺れてしまいそうなところを信号機の黄色のような鬼さんに助けられて、こうしてここまで連れてこられました」

「ええ、私も、同じでしょうなあ。黄色の鬼さんが船から落ちないように注意しろと怒鳴っていたのですが、後ろから乗ってきた人に押され、船縁から落ちて、そのまま気を失ってしまいました。その後のことはよく覚えていませんなあ」

この二人、ひとりには背広を着たサラリーマン風の若い男。もうひとり、服はぼろぼろで髪がぐしゃぐしゃで、人生を、いや人間そのものをリタイアしたような男。全く対照的な姿だ。

興味を持った青鬼が、ふたりに話しかけた。

「お前たち、現世で何やらかしたんや。見たところ、一方は、身なりもきちんとしているし悪いことするような奴には見えん。もう一方は、まるでごみ箱から出てきたような姿しとる。いた、体全体がごみ屋敷や。よっぽど悪いことしよったに違いない。さあ、話をしてみい」

二人は互いに顔を見合わせて、どちらから口を開こうかためらっている。

「地獄に来てまで遠慮せんかてええ。どっちからでもええから、しゃべってみい。ほな、わしが指名したる。まずは、背広にネクタイ締めとるお前からや。お前、死ぬときに白装束に着替えんかったんかいな。地獄には似合えへんかっこうやなあ。お前、みんなから浮いとるで。お陰で、三途の川にも溺れんかったんかいな」

「しょうもない冗談言わんとってえなあ。青鬼どん」と茶々をいれる赤鬼。

「すいません。このままの姿で首を吊ってしまいましたので、着替える暇がなかったのです。死んでからも背広を着ているとは思ってもいなかったのです。周りのみなさん方の準備がよいにびっくりしました」

「若気の至りやなあ。まあ、しょうがないわ。誰も生きとることで精いっぱい、死んだときのことを考えてないからな。今回の一件で、性根にはいったやろ。いつ死んでもええように準備して生きとかなあかんちゅうことや」

「はい、しっかりと性根にはいりました。次、死ぬときは、ちゃんと準備してから死にたいと思います」

「心配せんでも、もう死ぬことはないで。地獄で一生暮らすんや。それで、お前は、何で地獄へ来たんや」

「それを話さないといけないのですか」

「別にしゃべらんでもええけど、どうせ閻魔さまの前に座らされて、洗いざらいの悪事がばれた

んやさかい、その時、言いたりんこともあったやろから、もういっぺん白状してみい。ちっとは胸がすきっとするで。どうせ地獄の中へはいったら、口では言えん辛い目にあうんやから、しゃべるんやったら今のうちや」

「それなら、話をさせてもらいます」と直立不動になるサラリーマン。

「そんなに、気合をはめんでもええで」

「実は、見たとおり私はある商事会社に勤めていました。仕事がけっこう忙しく、営業の実績も順調に上げていたのですが、ある日、つい、ギャンブルに手を出して、回収した売上げ金の一部を使い込んでしまったのです」

「ようある話やなあ」

「使い込んだお金を穴埋めしようと、つい、サラリーマン金融からお金を借りたのです」

「また、ようある話しや」

「それで、その借金に知らない間に利子がついて返す金が倍増になってしまい、その借金を返そうと、また別のサラリーマン金融からお金を借りたのです」

「また、また、ようある話や」

「後は、ご存知の通り、あちらこちらのサラリーマン金融から金を借り続けまして、借金が雪だるまどころか、身長四十メートルもある怪獣ぐらいに増え、正義の味方のウルトラマンも対抗できず、当然、返す段取りもつかなくなりました。会社にも、自宅にも、こわい声の鬼のような人からの電話が、昼となく夜となく度々入るようになりました」

「誰が、鬼や。わしら、そんなアルバイトはしとらんで。それに、鬼は悪いことをする奴らを懲らしめるんや。変な譬えはやめてんか」

「す、すみません。人間界では、ひどいこと、悪いことをする人を鬼というもんで。まだ、生きていたときの気分が抜けないもので、失礼なことを口走りました。それで、その鬼みたいな、いや、鬼ではない悪い奴は、電話をかけるだけに治まらずに、会社や自宅にも押しかけて来るようになり、私は、どこにも居場所がなくなりました。どこへ行くあてもなく、風に漂うように歩いていると近所の小さな公園に着きました。ベンチに座ってぼんやりしているうちに、木の枝が私の眼に飛び込んできました。風が吹いて、枝が揺れ、そのようすがなんだか自分を手招いているように見え、つい、ふらふらと近づき、枝にベルトをひっかけて首を吊ってしまったのです」

「ほんまやなあ。ズボンにベルトがないわ。ベルトはこの世に置いてきたんかいな」

「さっきからズボンがずれて、歩きにくくて困っています」

「借金で首が回らなくなって、その首をとるために、首吊り自殺かいな。よう考えとるがな」

「いえ、首はとれませんで、首にベルトが食い込んでしまったので、死んでしまったのです。おかげさまで、今でもちゃんと首がついています」

「いちいち反論せんでもええわ。そっちの奴は何してきたんや。見るからにぼろぼろの服着とるなあ。あんまり、この世ではええ暮らしはしてなかったみたいやなあ」

「ええ、わたしも、このサラリーマンさんと同じように、昔は、きちんと背広を着て、ネクタイも締めて働いていました」

「サラリーマンにさんつけんでもええわ。それにしてもほんまかいな。どう見ても面影はないで

」

赤鬼と青鬼は放浪者の周りをぐるぐると回り、指で体のあちこちをつついてみた。

「ちょっと臭いますなあ、青鬼どん」

「これでもまだましな人と違うか。三途の川で落ちんかったら、もっと臭かったはずやで」

「黄鬼どんにちゃんと言うとかなあきまへんなあ。ちょっと変わった奴はいっぺん、剥ぎ取りばあさんに頼んで、地獄へ来る前に、せんたく板でごしごしと洗ってもらわんとあかんわ。そうせんと、地獄の中がくそうてたまりまへんな」

そんな鬼たちのぼやきにおかまいなしに男はしゃべり続ける。

「ある日、満員電車に乗っていた時のことです。あと少しで駅に着くなと思っていたら、電車が急ブレーキをかけたのです。乗っていた私は前方に大きく揺れ、倒れまいと必死でつり革に捕まりましたが、個人の力なんて所詮わずかなもの。後ろから押しかかってくる人々の重圧に耐え切れずに、親指が、小指が一本ずつ離れてゆき、最後にはとうとう頼みの綱の薬指さえも滑り落ち、私の体は前方に投げ出されてしまいました。最後の砦として何のゆかりもない私に全体重を預けていた他の乗客たちも、ダムの決壊による怒濤の水流のごとく、いっせいに電車の床面に向かって倒れていったのです。きゃーという女性の声、冗談はやめてくれという高校生のゆがんだ笑い。山のように折り重なった乗客。その後、線路に人が落ちたので、やむなく急停車をしました、御迷惑をおかけしましたと案内放送がありました。後から新聞で読んだら、飛び降り自殺だったそうです。先程まで一体感を味わっていた乗客たちは、全く赤の他人の顔をして、思い思いに立ち上がり始めました。みんなの犠牲となり床に這いつくばった私は、モップのようにゴミが付いたまま背広の襟を正しました。どうして、服がこんなに汚れるんだ。私の怒りは電鉄会社へと向けられました。それなのに、電車は何事もなかったかのように動き出し、乗客もまたいつものような無感動の顔を装っていました。ただ、私の体の痛みだけが現実のものとして残りました。いつもの駅を降り、いつもの改札口を通り、いつもの会社へ行こうとした時、自分の心にこんなことしていいのかと疑念が湧いたのです」

「なんや、難しげなこと言うとるで、このおっさん」

そんな茶々にも関わらずしゃべり続ける放浪者。

「心の反応に合わせるかのように、足は会社への道から反対方向に転換し、公園に向かったのです」

「そりゃいかんわ、休むんやったら、会社に連絡せなあかんで。それが社会人の努めや」

「そのまま公園のベンチに座りじっとしていました。太陽が左のほほを照らし、顔の正面を照らし、左のほほを照らしました。それが何回か繰り返されているうちに、公園でそのまま住んでいたのに気がつきました」

「気がつくのが遅すぎるわ。なんや、ようわかったような、わからんような話やなあ。それで、なんで地獄へ来たんや。公園に不法滞在ぐらいの理由で、地獄には来んやろ。ほかになんか悪いことしとんとちゃうのか」

「私もよくわからないのですが、思いつくとしたら、ハトにエサをやりにくる人がいて、あんまりお腹がすいていましたので、ハトに石を投げて追い散らし、そのエサを奪って食べたことでし



ようか」

「なんや、みみっちい話やなあ」

「そうです。ハトのエサは豆粒ほどの大きさなので手で拾うのが大変でした。そのあたりの木の枝を折り、箸にして口に放り込んだのを今でもはっきりと覚えています」

「そういう意味やないがな」

「私に追い払われたハトがうらめしそうに目を丸くしてこっちを見つめていました。ポーポーポッポと」

「ハトが豆鉄砲かいな」

「その日の晩、この頃に珍しく雪が降り始めました。今年の初雪でした。寒さから逃れようと公衆便所の軒先に体を埋め、震える手で100円ライターをつけ、ささやかながら暖をとっていました。ライターの炎をつけるたびに、昔の家族との団欒のようすが浮かんできました。鍋をつついてる4人の姿。そう、この時期には、家族揃ってよく鍋をしたものです。私が好きなのは、寄せ鍋です。豚肉に鶏肉、えびにあさり、はくさいと大根、豆腐と春菊、給料日には蟹がはい入ります。それらを箸でつかみ、もちろん木の枝の箸じゃないですよ、器にとり、七味をかける。この七味はできればゆず入りがいいですね。本来なら、寄せ鍋の具が主役であるはずなのに、この七味が脇役から躍り出て主役となり、七味を味わうために、具を食べている、そんな気がします。私の人生もそうでした。会社の中では、肉や野菜になりきれず、いつも七味のような調味料として端っこに座っていたのです。いてもいなくてもいい存在。賞味期限も遠い過去のこと。そんな自分の気持ちを知ってか知らざるか、鍋ではいつも七味が一番おいしいと思うのでした。その次は、焼肉が浮かんできました。焼肉も私の大好物です、そして妻にとっても。なぜなら食事の準備が簡単だからです。肉は買ってきたままのラップをとり、野菜類は洗って適当な大きさに切り、盛るだけ。その後はわたしが焼く肉奉行と化すのです。しかし、私が仕切れるのは、卓上コンロの火をつけ、鉄板が暖まった頃、おもむろに牛脂をのせるところまで。さあ、肉をのせましょう、たまねぎをのせましょう、しいたけはよく焼かないと家族が主導権を握りだします。私の役目は、放っておいても溶ける牛脂をあえて箸でつかみ、鉄板の上を何度も何度も繰り返し往復すること。まるで電車通勤と同じです。この意味のない作業こそが私の人生そのもののなのです。家族の中では、大黒柱になりきれず、大きな声もだせず、誰かのあとをついて歩き、どうでもいいことに一所懸命になっていたのです。そんな自分の気持ちを知ってか知らざるか、焼肉ではいつも牛脂を鉄板に必要以上に塗りたくる、必要でもない役を買ってでたのです。もちろん無料で」

「なんでも人生に譬えんでもええで」

「次は、何でしたでしょうか。そう、すき焼きでした」

「なんでもええけど、ほんま、鍋もんばかりやなあ」

「そのすき焼きの風景が現れるかどうかのときに、なんとあろうことか、ライターの火が消えてしまったのです。私は慌てて、もう一度ライターに火をつけました。再び、すき焼きの風景、それからおでんの風景、お好み焼の風景、湯豆腐の風景が次々と現れては消え去りました。そのうちにライターのガスもつき果てて、私はライターを手に握り締めたまま眠りの淵に落ち込んで

しまったのです。水の中を漂うような感覚から、体が宙を浮いているような気分になり、心と目が覚めたのです」

「ハトのエサが、腹にあたったんとちゃうのか」

「目を開けると、公園のベンチがどんと小さく見えだし、確かに自分は空に浮かんでいるではありませんか。さっきまで自分がいたはずの公衆便所を見ると、もうひとりの自分がダンボールの部屋の中で、ひざを抱えたまま、うずくまっている姿がみえました。ああ、自分の魂が、このまま、空に召されるのだと感じたのです」

「ここは空やないで、地獄やで。このおっさん、自分の話に酔ってまっせ。満員電車からずっと酔い続けとんと違いまっか、なあ、青鬼どん」

「ほんまやなあ、赤鬼どん。話を聞いたら、泣けるような泣けんような、笑えるような、笑えんような話や。それにしてもお前たちふたりとも家族があったんやろ。なんでこないなことになったんや。今さら言うても遅いか。今、家族はどうなっとんのや」

「私は、こわーい人たちからの電話がかかりだしてから、迷惑がかからんように妻と離婚しました。子供は妻の元にいます」

胸を張ってしゃべるサラリーマン。

「迷惑かからんように言うけど、それまで十分迷惑かけとるがな」

「すいません」

背を丸め、うなだれるサラリーマン。

「わたしは、公園に住みだしてから家族とは何十年も音信不通ですなあ。生きてるいるのか、死んでいるのかわかりません。今、家族は、ライターの火の中にいますよ」

遠い目をして返事をする放浪者。

「あんたが死んだんのは間違いないで」

「そうですね」

サラリーマン同様にうなだれる放浪者。

「まあ、そんなことどうでもええわ。それより、青鬼どん、さっきの話ですけど」

「なんや、さっきの話やいうて」

「いっぺん、地獄の中を見たいという話でっせ」

「そりゃ、見たいけど、この持ち場を離れるわけにはいかんがな。もし、他の鬼にでも見つかったら、閻魔さまにどやされるぜ。どやされるだけならええけど、この仕事、首になってしまうで」

「誰かに代わりしてもろたらええんです」

「誰かいうて、誰がおるんや。さっき黄鬼どんも言うてたけど、今、地獄は大忙しやから人手不足で代わりをしてくれる奴はおらんでえ」

「ほら、そこにおりまっせ」

「そこやいうて、あのふたりの人間か」

「そうです。あの人間です」

「あのふたりが門番してくれても、わしらが地獄の中にはいつたら、ここに来る黄鬼どんにば

れてしまうがな」

「大丈夫、大丈夫。そこんところは考えてますわ。あいつらにわしらに化けてもらうんです。まず、わしらの顔の皮をひきはがして、あいつらの顔の皮と交換しますのや。次に、わしらの鬼のパンツとあいつらの服を交換して、あいつらの体も赤と青のペンキで塗ってしまう。ひとこともしゃべらんようにうなずくだけにしたら、これで大丈夫。ばれんのとちゃいますか」

「大丈夫が2回続いたけど、ほんまに大丈夫かいな」

「大丈夫、大丈夫、おまけに大丈夫。三遍言うたら大丈夫でっしゃろ。あっ、4遍や。人生もいっぺん、地獄もいっぺんでっせ。なんでもやってみまひよ。ほな、さっそく実行や、そこのふたり、こっちへ来い」

「門の中へはいるのではないのですか」

「ええから、こっちこい」

ふたりは恐る恐る青鬼と赤鬼のそばに寄ってきた。

「ええか、今から、わしらの言うことよう聞くんやで。いっぺんしか言わんで。お前らの人生もいっぺんやったさかい」

立ち尽くしたままうなずくふたり。

「わしらは、これからお前らふたりの代わりに地獄へ行って来る」

「すると、私たちは極楽へ行けるのですね」

手を取りあって喜ぶふたり。

「何喜んどんのや。そんなこと一言もいうてないで。それに地獄へ行くか、極楽へ行くかは閻魔さまが決めることや。わしらにはそんな権限はないわ。それにお前らはこうして地獄に来とる。そんな話やない。わしらふたり、門の中の地獄に用があってな、ちょっと行ってこなあかんのや。今、地獄も忙しいてなあ、わしらの代わりに門番をしてくれるもんがおらへんのや。そこで、お前らふたりに、わしらが帰ってくるまで門番をして欲しいんや」

「地獄の門番など、今までしたことがないので、私たちふたりにできるのでしょうか」

互いに顔を見合すサラリーマンと放浪者。

「そんなん、わかっとるがな。地獄の門番したことのある人間なんかおるもんか。なあに、門番やいうても簡単や。さっきお前らふたりを連れてきた黄鬼どん知っとるやろ」

「はい、あの方は、私たちが三途の川で溺れていた時に助けてくれた命の恩人です」

「どんな命かわからんけど、まあええわ。黄鬼どんが、お前らみたいな地獄行きの人間を連れて来るさかい、その時に、この門を開けたらええだけや」

「でも、この姿では、すぐに人間だとわかってしまいますけど」

「心配せんでもええ。すぐに変えたるわ」

赤鬼と青鬼は、右手で自分の顔の皮を引き剥がすと、今度は、左手でサラリーマンと放浪者の顔の皮を引き剥がし、それぞれの顔に貼り付けた。

「痛、いた、いたたたった」

あまりの苦痛に顔を抑えてしゃがみこむ人間ふたり。

「まだ、地獄の中に入ってもいないのに、もう、お仕置きですか」

泣きながら鬼たちに訴える。

「心配あらへん、もう、すんだで。痛みは一瞬や。もう、大丈夫や」

自分たちの顔をゆっくりと触れるふたり。

「そこの水溜りで、自分たちの顔を試してみいや」

鬼の言葉に促され、水溜りに顔をつきだす。

「あっ、鬼や、鬼や、赤鬼と青鬼や」

お互いを指差しながら叫ぶ。

「そんなに、驚かんでもええで。これから地獄はもっと驚くことばかりや。あっはっはっは」

「さあ、次は、服を着替えよか。その背広とずた袋みたいな服とわしらのパンツと交換や。

どっちが、背広で、どっちがずた袋を着るんや、赤鬼どん」

「そんなん、決まってまっせ。サラリーマンの顔は、赤鬼のわたしがつけてますし、放浪者の顔は、青鬼どんがつけてまっせ」

「こりゃ、やられた。つい、近い方の奴の顔を選んでしもたわ。着る服のことまで考えてもなかったわ。もういっぺん、顔交換のやり直しや」

「か、かんべんしてください。もう一度、あの痛さには耐えられません」

手を摺り合わせ、青鬼に泣きをいれるふたり。

「こいつらも、あんなに言うとはです。ちょっと地獄の中を覗いてくるだけやさかい、辛抱してえなあ。青鬼どん」

「ちえっ、しゃあないなあ。我慢したるわ」

2鬼と2人は、背広と赤のトラのパンツ、ずた袋と青のトラのパンツを交互に履き替えた。

「さあ、これで完璧に人間に変身や。わしら二人さっそく地獄の中へ行ってくるやさかい、後のことは任せたで。さあ、青鬼どん。急ぎまひよ」

「なんや、あんまり気が乗らんけど。初めて着るこのずた袋が重いせいかいな」

「まだ、そんなこと言うて。舌が一枚しかないわたしらに、二言はありまへんで。さあ、行きまひよ」

渋る青鬼を後ろから押す赤鬼。

「早く、帰ってきてくださいね。こんなことがばれたら地獄よりももっと怖いところへ連れて行かれますから」

「心配せんでもええわ、地獄より怖いところはどこにもあらへんで。生きとったときのほうがもっと恐かったんとちゃうか、サラリーマン。ちゃんとお勤めしとったら、地獄のおみやげでも買って来たるわ。そうやなあ、地獄温泉たまごでもどうや」

意気揚々と門の中に入る赤鬼とまだ気持ちの整理つかない青鬼。後に残された偽者の鬼たちは、地獄の中にはいる鬼たちを不安そうに見送った。

### 第三章 地獄の入場チケット

---

「さあ、ここが地獄の中でっか、初めて入りましたわ、青鬼どん」

「ほんまに、ここが地獄の中かいな。いろんな色の鬼と人間が、あちこちでようよしとるで」

「あれ、さっきわしらが門の中にいれた奴らが行列をつくって並んでまっせ。ちょっと見に行きまひよ」

「こりゃ、みんな、何並んでんねん」

「青鬼どん、言葉使い変えなあきまへん。わしらに人間に化けとんでっせ。鬼ちゅうことがばれてしまいますがな」

「すまん、すまん。えー、何をお並びになられているんや」

「それでは、狸の尻尾が出てるようなしゃべりでっせ」

「いちいち、うるさいなあ、それなら、赤鬼どん、お前がしゃべったらええがな」

「ほな、わたしに任せてもらいまひよ。おい、あんた、なんで行列作とんのですか」

「もうええわ、普通にしゃべろう。顔かたちは変えられても、言葉使いまでは変えられへんなあ」

行列の一番後ろの人間が、ふたりの鬼をじろじろ見つめながら答えた。

「地獄巡りの入場券を買っているのです。この入場券がないと地獄巡りができないそうです」

「地獄巡りやいうて、なんやどっかのテーマパークみたいやなあ。入場券買うのに金があるんかいな」

「はい、お金があるそうです。一万地獄円だそうです」

「一万地獄円とな。わしらの一日の日当分やないか」

「そんなん、お前らみんな、地獄円を持とんかいな」

「いいえ、地獄円なんかは持っていませんけど、こうして生きていたときのお金は持っています。このお金となら交換してくれるそうです」

男は白装束の懐から財布を取り出し、鬼たちに見せてくれた。

「なんや、死ぬときにちゃんと金持ってきたんかいな」

「はい、地獄の沙汰も金次第という話ですから、身内が懐に、財布とお金をいれてくれていました。あの世にきたとき、胸の中が何かごそごするので触ってみたら、この財布でした。やはり、身内というものはありがたいものです。あなたたちもお持ちなんでしょう」

「そりゃあ、持ってることは、持ってるけど、ほら、こんな金か」

赤鬼は、財布を開けて、地獄円を取り出した。

「すごいじゃないですか、もうすでに地獄のお金を持っているなんて。死ぬ前から地獄に来ることが解っていたんですか？準備万端ですね」

「なんや、ほめられといんのか、けなされとんのかわからんけど一万地獄円は痛いおますな。青鬼どん」

「わしも、なんとか持ってるけど、給料日はもうすぐやから、今、一番金のないときやから。ほら、見てみい、こんなに財布がペラペラや」

「青鬼どんは、札束かもしれんけど、わたしなんか、小銭で膨れてるだけでっせ。それでも、まあ、しょうがおまへんわ、これで地獄巡りができるんやったら、安いもんでっせ。青鬼どん」

「安いか高いかは、中へはいつてみなわからへんがな。けど、もう金はとられんやろな。」

「そりゃわかりまへんけど。これ以上金とるんやったら、鬼でっせ」

「鬼が鬼に向かって鬼と叫ぶんかいな。なんや、変な感じやな」

行列がどんどん進んで、赤鬼たちの番になった。目の前にあるのは自動販売機。

「なんや、入場券買うのは、自動販売機でっせ」

「ほんま、やっぱり地獄も人手がおらんのか、いな。それとも人件費のカットかいな」

「なんや、ありがたみがおまへんな」

「何をつべこべ言うとするんや。さっさと買わんかいな、次の奴が後ろで待っとるで」

「あ、これは、これは紫鬼どんやないか」

つい声をかけたものの、しまったという顔で慌てて口を手でふさぐ青鬼。

「なんや、親しげに声かけてきて。わしはおまえみたいな貧乏くさい奴なんか知らんで。それに、地獄はいっぺんきりや。何べんも来れるはずがないやろ」

「す、すいません。このアホがつい声をかけてしまいまして。入場券の買い方がわからなかったものですから」

サラリーマン姿の赤鬼が急いでその場を取り繕う。

「ここに、お金を入れたらいいんですね」

「なんや、お前ら、自動販売機も知らんのかいな。生きとったとき、どんな生活しとったんや」

「こいつ、貧しかったさかい、あんまり、電気製品や、世間のこと知らんのですわ」

必死で、弁護する赤鬼。

「わしかて、自動販売機ぐらい知っとるわ」

口をとがらし、怒り出す青鬼。

「何仲間割れしとんのや。ごちゃごちゃ言うんやったら、次の奴と交替や。お前ら、一番後ろにさがとれ」

「すんまへん、すぐにお金をいれまして」

赤鬼は、青鬼をなだめながら、自動販売機にお金をいれ、入場券を手にした。

「なんや、あの紫鬼どんは。ちょっとサービス悪いで。もうちょっと口の利き方気いつけんといかんのとちゃうか」

「しょうがおまへん、ここは地獄でっせ。ほかにもうひとつの地獄があつてサービス競争でもさせたら変わるんとちゃいますか」

「それ、おもしろいなあ。閻魔さまに「お前は地獄へ行け」と言われたときに、鬼が寄ってきて、こっちの地獄巡りの方がサービスええで、こっちの地獄巡りはあんまり痛い目会わんでもすむでいうて、人間の取り合いするんかいな」

「ほんまですな。そうなったら、わたしらもぼちぼちしとれませんで。近所の話し方教室にでも行って、地獄のマナー接客術でも学ばなあきまへんで」

「鬼も、鬼というだけではうかうかしとれんということやなあ」

「ほなけど、なんで、地獄に来た人間に、鬼がぺこぺこせなあきまへんのや。地獄に来た奴らは、この世で、悪いことしよったんとちゃいますか。そんな奴らにおせいじ言うたかて、つけあがるだけでっせ」

「そりゃそうやけど、誰も懲らしめる人間がおらん地獄も寂しいで。門を開けたり閉めたりするから、わしらの存在価値があるんや。めったに人間がこなんたら、わしらずっと立ちっぱなしで、そのまま鬼の金棒にでもなってしまうで。へたすりゃ、リストラされて門番の仕事なくなってしまうがな」

「そんなアホな。鬼に金棒やのうて、鬼が金棒かいな。金棒はおいといて、リストラは困りますな。嫁はんもおるし、子供もまだ小さいよって、今、仕事を首になったら、明日から食っていかれません。さっきのサラリーマンやないけど、家族みんなで首吊らなあきまへん。そんなにたくさんのベルト持っていませんわ」

そりゃ、わしも一緒じゃ。お互いにベルト貸しあいこせないかなあ」

「どっちが先に使いましょうか」

## 第四章 海地獄

あれやこれやと赤鬼と青鬼が話しながら、前を歩いている人間たちにひつついて、最初の地獄、海地獄に着いた。

「ああーこれが海地獄かいな。あお、あお、あお、あおいなあ、青鬼どん」

「あんまり、あお、あお言わんといて、あおがあほに聞こえるがな。それにしても、ほんま、わしの皮膚の青さよりも青いがな」

「ほら、池の中が透きとっうてますで。中からふつつつと煮えたぎっとる音が聞こえてきまっせ」

「地獄にこんなにきれいなところがあるとは思わなんだ。ほんで、わしらここでどないなるんや」

「えええい、お前らみんな、ここで立ち止まれ」

大きな声がした先を見ると、そこには藍色の鬼が一行の前に立ちはだかっていた。

「へー、藍色どんや。あいつここで働いとったんかいな」

「青鬼どん、藍鬼どんのこと知っとたんですか」

「そりゃ、同じ青色系統やさかい、親戚みたいなもんや」

「そこの後ろの方の、背広着た奴とぼろぼろの服着た奴、わしがしゃべっとんやから黙って聞いとかんか」

「ふへー、わしらのことでっせ、青鬼どん」

「そうやなあ、みんな白装束やさかい、わしら目だってしまうがな」

首をすくめ、少しでも体を小さくする赤鬼と青鬼。

「紹介しておく。わしが、ここの海地獄の番人の藍鬼じゃ。今日の地獄巡りのツアーは百人と聞いておる。よく参加してくれた。礼を言う。そこでお前らみんな、その池の前で整列しろ。今から記念写真の撮影じゃ」

「写真撮るや言うてまっせ。それも記念写真やて」

「何が記念なもんか。地獄に来る奴に記念も何も無いがな。どっちかいうたら不記念や。金もとられて心まで不機嫌や」

赤鬼や青鬼たちが交わす台詞に、ほかの人間たちもうなずきながら池の前に立った。

「さっさと並ばんかい。もたもたしてたら海地獄へ放り込むぞ。今日の一行も人数がたくさんおるから、一番前の奴はうんこすわり。2番目の奴が馬跳びのかっこう。3番目の奴は、普通に立っとれ。それ、時間もないから、写真撮るぞ。みんないっせいに、にっこり笑って、うーみー」

藍鬼の合図で、フラッシュがたかれ、シャッターが降りた。

「よし、写真撮影は終わりや。写真ができるまでしばらく待ってくれ。わしがこれから言うことよく聞くんやぞ。ここが海地獄や。透きとおった青色のきれいな池に見えるかもしれないが、中にはいると熱いぞ。ほら、みてみい、泡が次々と浮いてきている。あれは、お前たちより先にはいった奴が、熱さに溶けてしもうた亡骸や。ほら、上をみてみい。耳をすますと、湯気の中から、苦しみの悲鳴が聞こえてくるやろ」

「なんや、恐ろしいこと言うてまっせ、青鬼どん」



「ほんまや、あの池の中にはいったら、姿かたちなくなるんかいな。金はろてまで、姿かたちがなくなったら割があわん。はよ、ここから逃げなあかんがな、赤鬼どん」

ふたりの鬼は、後ろを向いてこそこそと逃げようとしたが、後ろには、藍鬼の一族全員で、通路を封鎖していた。

「どこへ行くんや、そこの二人。ここは一方通行や。前だけ向いとれ」

「青鬼どん、前も後ろも地獄でっせ」

「心配せんかて、あたり一面すべてが地獄や、赤鬼どん」

声をだすのは赤鬼と青鬼だけでなかった。一行の人間たちも恐れをなして、ざわめきはじめた。

「ちょっと静かにせんかい、お前たち。この世ではさんざん悪いことしたくせに、今さら、何、びくついとんのや」

耳をつんざく藍鬼の怒声。きーんと耳鳴りがする。これもお仕置きのひとつか。

「だがな、お前ら、心配せんでも、この海地獄に入らんでもええが方法がひとつだけあるで」  
急にやさしく猫なで声に変わる藍鬼。

「ど、どんな方法で、ですか」

「お、教えて、く、ください」

一行から矢継ぎ早に質問の声があがる。

「そんなに、慌てんかてもええ。今さっき撮った記念写真があるやろ。その写真を買った者だけが、この海地獄を無事に通過できるんや。まあ、写真が安全手形みたいなもんやなあ」

「そ、その写真、一枚、い、いくらするのですか」

このままだと自分が一番に最初に海地獄にはいらなければならない、先頭の人間が必死の思いで聞いた。

「そうやなあ、今日は、天気もええことやし、大出血サービスで一万地獄円で、どうや。安いやろ」

「さっき、地獄巡りに入るときにも一万地獄円払ったのですけど・・・」

「さっきはさっき。今は今。この海地獄を清潔に、安全に維持管理していくためには、大変なことなんでや。ゴミも拾わなあかん、水もちゃんと浄化せなあかん。なんでもただではできんのか。それをここにいるみんなにほんのちょっと協力してもらっただけじゃ。いやなら、ええ、いやなら。仕方がないなあ、海地獄に入ってもらっただけや。どうせ、海地獄へはいるんやったら、金を持っといてもしょうがないやろ。さっさと出しいな。それに、お前がはいったら地獄の水が汚れてしまうから、次に入る奴はちょっと金額が上がってしまうで。今なら、一万地獄円。ぽっきり一万地獄円や。大感謝祭価格やで。ほなけんど、びた一地獄円たりとも、まけられへんで」

「青鬼どん。藍鬼どんが、あんなこと言うてますで。藍のくせして、愛がおまへんな」

「ほんま、勝手なことを。また一万地獄円ふんだくる気やで。もう、今日から親戚でもない。赤の他人や」

「赤やのうて、青系統て言うてましたがな。怒ってもしょうがおまへんで。命には変えられしまへんがな」

「あーあ、また、一万地獄円の出費や」

赤鬼たちが財布を取り出し、ぼやいていると、一行の中から人相の悪い、いかにもという男が藍鬼の前に進みでてきた。

「やい、やい、さっきから黙って聞いていたら、頭にのりやがって。俺たちから金をふんだくろうって魂胆にはのらねえぜ。俺はこうみえてもこの世ではそれなりに名が通った男だ。このままお前たち鬼の言うとおりにさせないぜ」

そうだ、そうだ、ふざけんと同じ仲間と思われる男たちが十人あまり出てきて、藍鬼を取り囲んだ。

ほう、それならどうする気だと笑みを浮かべて笑う藍鬼。

こうしてくれると男が叫ぶと、袖からキラリと光るものを手にして、藍鬼に飛び掛かる。

「はは一ん、地獄へ来てまで、そんなもん持ってたんか」

そりゃーという藍鬼の掛け声とともに男は地面に叩きつけられた。他の男たちも次々と藍鬼に飛び掛るが、結果は同じ。全員、地面に這いつくばる。叩きつけられた勢いで、男たちの刃物が海地獄の中に沈む。しばらくすると、プカッと大きな泡がひとつ、またひとつと浮いてきては割れた。

「あの男たち、あっという間に叩きのめされてしまいよったで。十人の荒くれ男相手に藍鬼どん強うおまっせ」

「当たり前や、地獄道五段の猛者やで。人間ごときがいくら束になってかかっても、かなうもんか」

男たちの行動に小さなガッツポーズで応援していた残りの一行も、この様子を見て、自ら進んで、次々と記念写真を買っていった。転がっていた男たちも立ち上がると、藍鬼にすいませんでしたと謝りながら写真を買っている。

「なんや、あいつら。さっきの勢いはどこへ行ったんや。刃物がプカッと終わりか。ぺこぺこ頭下げて写真買ってまっせ」

「どこの世界も一緒やなあ。弱い奴には強うて、強い奴には弱いんや。この切り替えが早い奴だけが、生き残るんや。この世で一度失敗したから、用心深くなっとんやろ」

一行に倣い、赤鬼と青鬼もしぶしぶ一万地獄円と交換に記念写真を手にした。

「なんや、写真に写ったわしの顔、生気がありまへんなあ」

「しょうがないやろ、借金まみれで首吊ったもんの顔やで。わしかて、えらい貧乏くさい顔しとるなあ」

「ハトのエサ奪って、地獄に落ちたもんの顔やからしょうがおまへんで」

不記念写真をまじまじと眺めながら、文句をいう赤鬼と青鬼。

「さあ、写真を買ったもんは、海地獄は無事通過や。次の地獄が待っとるで。なんや、写真を買えん奴がいるのか。なに、もうお金がないんか。あることにはあるが、半分の五千地獄円にまけてくれやと。ちょっと財布見せてみい。なるほど、五千地獄円のほかに金はないな。今までさんざん悪いことしてたくせに、肝心なときに金がないのか。仕方がない奴や。まけてやる」

その時、男の顔が引きつった。

「待たんかい。お前、わしに嘘ついたな。地獄に来て、鬼に嘘ついた奴は自動的に舌が固まるんや。どこや、こいつ、髪の毛の中に金を隠しとったな。地獄に来てまで嘘ついた奴は許さん。おい、お前たち、こいつの舌を引っこ抜いて二度と嘘つけんようにしてやれ。抜いた舌をどこに放るんかて。そのままゴミの日に出したら燃えるゴミになってしまう。二度と嘘つけんように、溶けるゴミとして海地獄の中へ放り込んでしまえ」

藍鬼の命令で、財布の中身を誤魔化そうとした人間が藍鬼の子分に引っ捕らえられた。鬼は男の口の中に手を入れ、舌をぐんにゅと掴むと、そのまま引っこ抜き、海地獄の中にポイと放り込む。

「あー、あいつの舌一枚、放り込まれましたで。浮いてきまへん。もう、溶けてしもたんでっしゃろ」

「ほんまや、泡が浮いてきよったで」

ふぎゃふぎゃふぎゃふぎゃふぎゃらふぎゃらと舌を抜かれた男が騒いでる。

「うるさい。何、二度と嘘をつきませんから、許してくださいだと。嘘をつくという嘘をつきませんということと違うんか。なんや、頭がこんがらがってきたわ。まあええわ、ふぎゃふぎゃ言われてもこっちがやかましい。舌の代わりにこの札でも貼っとけ」

そう言うと、藍鬼は、男の髪の毛から札を取り出し、口の中に貼り付けた。おかげで男はしゃべれるようになった。

「今回は、御迷惑おかけしました」

男は、藍鬼にぺこりと頭をさげると先行く仲間の方へ逃げて行った。男の口の中から、二枚の札が見えた。

「しまった。一枚余分に貼ってしもた」

くやしがる藍鬼。そして二枚舌の男の背に向かって叫んだ。

「まあ、ええわ、今回は、これで許してやる。今度、鬼に嘘をついたら承知せえへんで。舌だけやなく、体ごと海地獄行きや。溶けてしもたら楽になると思ったら、えらい勘違いや。体は溶かされなくなってしもても、心は一生地獄の中や。永遠に熱い思いをして生きていくんやからな」

赤鬼が青鬼に尋ねる。

「お、恐ろっしゃ、一生やて、いつまでやるか」

「そりゃ、死ぬまでや」

## 第五章 山地獄

---

舌を一枚抜かれたものの、誰一人減ることなく、一行は次の地獄へと向かった。

「なんや、案内板が立ってまっせ」

「なに、なに、山地獄へようこそ、て書いとるで」

「何がようこそや、誰もこんなとこ来とうおまへんで」

「よう来たのと、先ほどの藍鬼に負けないくらいの大きな声がした。

声のする方へ、みんなが顔を上げると、山の高台に鬼が立っている。

「おっ、あれは、茶鬼どんや」

「誰が、わしの名を気安く呼んどんのや。そこの、背広の男か。まあ、ええわ、気安く呼ばれるちゅうことは、そんだけ人気物ちゅうことや」

「なんか、こんどの鬼は、くだけたこと言ってますで。さっきの藍鬼どんと偉い違いやなあ」

「ほんまかいな。」また、わしらから金ふんだくこと考えとんのとちゃうか」

「わしが、この山地獄の番人、茶鬼どんや。こりゃええわ。茶鬼のひびきが、チャオに聞こえる。やあ、人間のみなども、チャオ、チャオ。なんや、元気ないの。もっと元気出さんか」

苛立った茶鬼は、山の岩を掴むと、一行に向かって投げつけてきた。

「チャ、チャ、チャオー」

岩を避けながら、無理矢理作った笑顔で応える。

「あぶな一、何するねん、あの茶鬼は。それにしても鬼にしては元気のいいキャラやでっせ」

「そうやなあ、でも、これから、地獄で苦しめに遭う奴らに、元気だせというても無理があるがな」

チャオの返事に気をよくした茶鬼がしゃべる。

「よっしゃ、みんな、これからわしのことよく聞いとけよ。ここは、山地獄や。これからみんなに目の前の山に登ってもらう。山やいうてもただの山と違うで。地獄の山やからちゃんとしかけがある。まずは、あちこちのすき間から熱湯が噴き出す。熱湯にかかったら大やけどや。気をつけてや。それをうまい具合に避けると、あたり一面湯気で前が見えんようになる。すると、上から大きな岩がごろんごろんと転がってくる。その岩を受け止めてもええ、投げ飛ばしてもええ、跳び乗って玉転がししてもええ、ついでにその上で傘を回してもええ。腹がすいとる奴は、丸呑みにしてもええ。とにかく頂上まで登って、向こう側に下りる。そこがゴールや。簡単なこっちゃろ」

「口だけで言うんは、何でも簡単なことだっせ」

「どっかのテレビ番組でみたようなゲームやなあ」

「しかけを全部言うてくれるなんて、親切な茶鬼どんでんな。ちょっとやってみたい気持ちになりますな」

「人間の征服欲を満たすゲームやで」

「なんか質問はないか。ないんやったら、先頭バッターから行くで。クリーンヒット打ってや」

茶鬼が山の上から、スタート地点に降りてきた。

すいません、質問があるんですと先頭の間人が手を上げる

「なんや、言うてみい」

茶鬼は、腰に手をあて教師気取りだ。

「いきなり、本番ですか。練習はさせてくれないんですか」

「人生もいっぺん、地獄もいっぺん、山地獄もいっぺんや。練習はない。さあ、行くで」  
もう一度、先頭の間人が質問する。

「途中で、ひき潰されたら、どうなるのですか」

「何べんもしつこいやつやなあ。ひき潰されたらそのままや。上からどんどん岩が転がってくるから、だんだんと薄っぺらになって、どこかに飛んでいくんと違うんか。まあ、試してみいや」

「そ、そ、そんな」

「いややったら、ひき潰されんようにしたらええだけのこっちゃ。さあ、質問はこれでおしまいや。みんな、元気だして出発や」

どどんどどんどどんどどんと太鼓の音が鳴り響く。

「茶鬼どん、えらい元気ですなあ」

「ほんまや、山地獄に置いとくのもったいないで」

「あっ、さっきの先頭の間人が行きよりましたわ。むちゃくちゃ突っ込んでいきましたで。いきなり地面から熱湯が噴出した。熱い熱い、言うてる。そのまま、しゃがみこんでしもた。わー。今度は湯気が出てきた。あたり一面、白うなってしもて何も見えへん。音、音がしてまっせ。なんの音やろ。地響きがするような大きなごろん、ごろんいう音や。なんかぐしゃいう音がしましたで。あいつ岩にひき潰されてしもたんやろか。あらら、なんやぺらぺらの新聞紙みたいなもんが漂ってるわ。茶鬼どんが手で掴みよった。ふーんて湧かみよりました。ちり紙とちゃうで」

「かわいそうに。せめて祈ってやろか。ほなけんど、これで悪人から紙さんになったんとちゃうか、あいつ。よかった、よかった」

はんにゃーは一らーみーたーと手を合わせる赤鬼と青鬼。

「はい、はい、次の間人出番や。さあ、一番バッターに負けんように、元気だして行けよ」

二番目の間人が茶鬼に尋ねる。

「先に行った間人は、どうなったのですか」

「どうなったもこうなったも、お前、見ていたんと違うのか。大岩に踏み潰されてしもうたやろ。後はこのとおり」

とって先ほど湧をふいた紙をみせる。

「残念なことや。でも、死んでからもこうして他の人の役に立つとるからたいしたもんや。人間なんでも、何でも、最後が一番大事や言うことを、身をもってあらわしてくれたんや。お前も見習わなあかんで。さあ、大声だしたら気合がはいるで。お前なら、ちゃんとこの山地獄は越えられる。わしは確信しとる」

そう言うと、茶鬼は、二番目の間人を後ろから突き飛ばした。

「茶鬼どんがなんか訳のわからん励ましをしてまっせ」

「ほんまや、なんの根拠もない話やで」

赤鬼と青鬼が見つめる中、二番目の人間は最初の人間と違って、慎重に、山地獄を一步、一步踏みしめて登っていく。

「さっさと登らんかいな。こんなにぎょうさん人がおるんや。そんなにもじもじしてたら、日が暮れてしまうわ」

茶鬼は、右手に持っていた金棒を振り回し始めた。

「ひえー」

叫び声をあげながら、急いで山を駆け上る。しかし、登っても、登っても、下りのエスカレーターのように地面が崩れ、上へと登れない。もたもたしているうちに、しゅーしゅーという音とともに、熱湯が噴き出し、あたり一面湯気の中。岩の転がる音がして、新聞紙が一枚、風に吹かれた。その紙をつかんだ茶鬼がまた涙をかんだ。

「くしゅん。二番目の奴もかいなかったな。さあ、三番目の奴出て来い。そろそろ、主軸やで。お前たちの本当の力見せてくれ」

三番目の人間はえらい、かっぶくのいい男だった。この世ではさぞかしい思いをしてきたに違いない。

「す、すいません。お、お願いがあるんですけど」

「なんや、お願いで。新聞紙じゃなくて、絵本の方がええのか。お前の体型なら、十分可能性はあるや。それとも、百科事典かいな」

「いや、そうじゃなくて、ここに一万地獄円ありますから、なんとか山地獄をみのがしていただけないでしょうか」

「なんや、地獄に来てまで、鬼を買収する気か。そう言えば、お前の顔見たことあるわ。なんとかの選挙かなんかに出て、違反して掴まった奴とちゃうか。テレビか新聞のニュースで見たことがあるで」

「地獄にもテレビや新聞があるのですか」

「当たり前や。お前らみたいな悪いことしよる奴らがおるから、下界から地獄ニュースと地獄新聞が流れてくるんや。毎日、新聞読むんが日課や。なんならスクラップに記事を貼り付けてあるから見せてやろか。いくら誤魔化してもあかんで」

「はい、そうです。いえいえ、誤魔化しているなんて、そんなことはありません。とにかく、これで許してもらえませんか」

この世ではしたことがない辞儀をする男。だが、これまでふんぞり返っていた期間が長いので、首だけしか曲げられない。

そんな姿を観て、藍鬼はにやっとしながら

「まあ、ええわ。お前がそこまで言うのなら。どうせ、この世の魂地獄までや。そう簡単には生き方を変えれんやろ。この茶鬼のころにも仏のころがあるで。寄付という形で、その一万地獄円預からせてもらうわ」

その言葉を聞き、他の一行たちも、わたしも寄付を、わたしも寄付をとお札を片手に茶鬼の周りを取り囲む。

「そんなに、慌てんでもえ。順番や、順番や。わしの前に、一列に並んでえや」

茶鬼は顔をほころばせながら、うれしい悲鳴を上げている。

「なんや、やっぱり金があるんかいな。それにしてもあいつら人間、この世では、一円足りとも他人のために金なんか出したことがなかったくせに、我先に寄付してまっせ」

「今も、一緒や。自分の命のために寄付しとるだけや」

「それにしても、金があるんなら、いるんでさっさと言うてくれたらよかったのに。つぶれてしもた一番目の人間と二番目の人間が可愛そうやおまへんか」

「何、地獄に来た奴に同情しとんねん。ほら、みてみい、あのごみ箱の新聞紙」

「あの、新聞紙がどないかしたんですか。あれは、大岩にふみつぶされた人間でっせ」

「何、言うとなねん。あれは、もともと新聞や。茶鬼どんが毎日読んどる地獄新聞や。ほら、きのうの日付がはいとるやろ。わしら鬼は手品師とちゃうで。人間を新聞紙になんかにできるわけないやろ。多分、一番目の人間と二番目の人間は茶鬼どんの手下が人間に化けとったんやろ。ほら見てみい、山地獄から茶鬼どんの子分がにこにこしながら降りてきよるで」

「こりゃあ、やられたなあ。あれは全部演技かいな。うまいことするなあ、茶鬼どん」

「何、感心してんねん。さあ、俺たちの番や。また、一万地獄円とさよならや」

お金をしゅしゅ茶鬼の前にある寄付金箱に入れる赤鬼と青鬼。

「まいどーあーりー」

## 第六章 白池地獄

---

こうして、赤鬼と青鬼たちの一行は、山地獄でも誰一人減ることなく、次の地獄へと向かった。

「このまま、地獄めぐりしたら、わてら一文無しになってしまいまっせ、青鬼どん」

「何言うとんねん。赤鬼どんが、地獄の中へいっぺん行ってみたいやいうから、一緒に来たんや。今さら、戻れんがな。こうなったら、落ちるとこまで落ちなしょうがないで」

「青鬼どん、急に悟りを開いたなあ。ほんでも、落ちるいうても、金が財布から落ちていくだけでっせ」

「ようこそ、白池地獄へ」

体中、真っ白な鬼が出迎えてくれた。

「今日の、地獄めぐりの連中は、あなたたちですか。よくここまで無事に来られましたねえ。大変だったと思います。ここは、今までの地獄と違って、息抜きみたいなところですよ。ゆっくり休んでいってください」

「いやに、やさしげにしゃべる鬼やなあ」

「わしも、白鬼どんに会うのは初めてや。わしら鬼よりも体もでかいなあ。やさしくふるまう奴ほどえげつないことしよるからなあ。気いつけなあかんで・財布ちゃんと握っとかなあかんで」

「さあ、みなさん、もっと私の方に近寄ってください。ちょっと風邪で喉を痛めてしまって大きな声がでないのです」

一行は、恐る恐る白鬼の周りに寄った。

「みなさんの、目の前に見えるのが、白池地獄です。ほら、ぶかぶかと池の底から泥が湧いてくるのが見えますか。一見、何の変哲もない泥池に見えますが、この泥は、地の底から湧いてくる高温の泥です。みなさんが今まで犯してきた罪に対するすべての生き物の怒りが源となっています。みなさんも、経験したことがおありでしょう。何か、他人に騙された時やひどい目に遭った時に、こころの奥底からふつふつと湧き上がってくるあの怒りの感情を。この怒りの感情を集めたのがこの池なのです」

「なんや、白鬼どん、学者みたいなこと言ってまっせ」

「なんかしらんけど、勉強になるなあ。地獄の池の由来を教えてもらたんは、初めてや」

「ですから、あなたたちがこの池に入った瞬間、うらみつらみの感情が取り囲み、体中を喰い破り、あなたたちの心を熱湯にさらすのです。ですが、心配しなくても大丈夫です。このうらみつらみの感情は、個人的なものです。今までのあなた方が人に対してうらみを買うような行為をしていないのであれば、この池から無事に生還することができます」

「なんや、白池地獄よりも、白鬼どんの話の方が怖いなあ」

「ほんまや、熱い池の前でいるのに、こころがぞーっと寒うなってきた」

「さあ、順番にお入りください。あなたたちがこれまで人にした行為をひとつずつ思いうかべ、祈りをこめて」

先頭の間人が、手をあげて質問をした。



「どうか、この白池地獄に入らなくてもいい方法がないのでしょうか。例えば、記念写真を撮るとか、寄付をするとかして」

「だめです。この白池地獄には、必ず入ってもらいます。ここは、必修コースなのです。ただし、この池にはいっても無事で出られる方法がひとつだけあります」

どうすればいいんでしょうかと神妙な顔で尋ねる。

「簡単です。私と同じように、この白色の泥を体中につけてはいれば、うらみつらみの感情から皮膚を守ることができるのです。それだけではありません。その醜く太った体が私のようにスリムに、しかも、お肌がすべすべにきれいになるのですよ。そうすれば、十歳若返る事も可能です」

「ありゃ、白鬼どんの体の白さは化粧かいな。」

そう言えば、なんやちょっととってつけたような白さやと思うとりましたんや」

赤鬼と青鬼は腕を組んで妙に納得する。

「じゃあ、その白い泥を私たちにも分けてくださいませんか」

髪の毛一本から骨の髄まで他人からうらまれの塊の一行が口々にお願いする。

「お分けしますが、ただというわけにはいきません」

「ほら、なんか怪しいと思いましたは、青鬼どん」

「ほんまや、今までの地獄と同じや、赤鬼どん」

「この一箱で一万地獄円でお分けします。この一箱で体全体を十分塗ることができます。ちょっと体の大きい人なら、二箱は必要ですねえ。ですが、この泥を塗れば安心。白池地獄も泳いで渡れます。しかも、塗った部分の筋肉の脂肪が分解して、若いころの体の姿に戻れますし、肌はみずみずしく、細やかになれますよ。こんなお得な商品はありません」

「体に塗った泥が溶け出す恐れはないのですか」

「大丈夫です。この商品には、絶対の自信を持っています。もし、不良品がありましたら、いつでも交換します。連絡先はここです」

と、白泥美容パックと宣伝しているチラシをみんなに配る。もちろんティッシュ付きだ。

「あんなこと言うてまっせ。もし、不良品だったら、交換する前に白池地獄でひどい目にあってますがな。電話する暇なんかありゃしまへんで」

「ほなけど、わしらもあの白い泥塗らなあかんのやろか。地獄に来た人間どもはおいておいて、わしらはなんも恨まれることなんもしとらんがな」

「何言うてまっせ。わしら地獄の門番や。地獄に来た奴らは、わしらのこと恨んどんは間違いおまへん」

「そりゃ、逆恨みや」

「何、言うてはりますのや。自分のしたことやのうて、自分がされたことを覚えとんのが人間でっせ。それに逆恨みが一番恐いんですがな」

「なんでや」

「それが人間の性（サガ）ですがな」

「もうええわ。一パック買おか。わしらもちょっとは肌がきれいになるんやろか」

「青鬼どんは、水色鬼どんに、わたしは桃色鬼になるんですかいな」

「そうなると、戸籍から変えなあかんから面倒になるなあ。家族・親戚にも相談せなあかん」

「青鬼どんはよろしおまんがな。水色鬼やいうたら聞こえがええおまっせ。なんやさわやかな風が一阵吹いてきたような名前ですがな。歌でも歌われそうでっせ」

「そうかいな。ちょっと照れるな。そなに言われたらそういう気がしてきたわ」

水色鬼、水色鬼と口ずさみだす青鬼。

「それに較べて桃色鬼ではあきまへん。なんやぼったくりの風俗店のオーナーか、不純異性交遊の元祖みたいで、聞こえが悪おますわ。ピンク鬼にしたらよけいに卑猥ですなあ。こんなん、あかん、あかん」

赤鬼と青鬼が真顔で相談しているうちに、一行の者たちは我先に白鬼から泥パックを購入すると、体中に塗りたく始めた。

「なんや、この泥気持ち悪いなあ」

「そうでっか。白鬼どんが言うもったように、お肌がすべすべになるような気がしまっせ」。

「それは、泥ですべとんのや」

「青鬼どん、ちょっと背中に塗ってくれまへんか。手が届きまへんよって」

「よっしゃ、よっしゃ、まかしとき。なんや、昔、風呂で子供の背中洗ってやった時のこと思い出すがな。懐かしいなあ。ごし、ごし」

「あっ、痛い。昔の思い出に耽るんはええけど、せっかく塗った泥流さんとってくださいよ。もうパックも買えまへんよって。財布は空でっせ」

「顔も塗るんかいな」

「もったいない。白池地獄につかるところだけでええんとちゃいますか」

「憎しみの湯気が顔にまとわりつくかも知れんがな。耳だけ塗り忘れて、もし引きちぎられたら大変やで」

「体に泥パックをされた方は、さあ、地獄の中にお入りください」

うわべだけやさしくふるまう白鬼にうながされて、体全体に白泥パックを塗りたくった一行は、順番に、泥が溶け出さないようにひと足、ひと足、慎重に白池地獄に入っていた。

「ええ、湯やな」

「ほんま、ええ湯でっせ。地獄にもええところありまん。日ごろの疲れを癒すためにも、ゆっくり白池地獄に浸かっていきまひよ」

「ほんでも、あんまり、ゆっくりしてたら体に塗った泥が溶けてしまうで」

「ほな、はよ出まひよ」

赤鬼、青鬼たちの一行は、せっかくの白池地獄を十分堪能する間もなく、池からあがった。ふと、自分たちの体を見ると、全身から白い泥がすべて洗われていた。

「なんや、この泥パックせんかて、この白池地獄大丈夫やったんと違いますか。白鬼どんに、一杯喰わされましたで」

「喰わされてはないがな。白池にわたしのダシが出ただけや。ほら、見てみい、今は、昼飯時かいな。ぎょうさん鬼たちの行列ができとるで。ここがあ有名な地獄ラーメンやったんや。あの

池の水をどんぶりのいれて、ラーメンとして喰いよるで」

「わたしら人骨スープかいな」

「金どころか、骨までしゃぶられてしもたわ」

「はよ、次の地獄へ逃げまひよか」

## 第七章 カマド地獄

「はい、こちらは、カマド地獄です。今、カマドに火をつけたばかりですから、もうしばらくお待ちください。湯が煮えたぎったら、入りごろです。一人ずつお呼びしますので、それまで整理券を持って順番にお並びください」

今度の地獄で、一行を出迎えてくれたのは、紅鬼。てきぱきと整理券を渡していく。カマドには、木切れがどんどん追加され、火がどんどんと大きくなっていくが、カマドからは、まだしょぼしょぼとしか湯気があがっていない

「紅鬼どんやで、赤鬼どん。あんた、知っとんのか」

「うーん、じいちゃんのじいちゃんのじいちゃんと元をたどれば親戚かも知れんけど、あいつは知らんわ」

一番の整理券を手にした人間が紅鬼に尋ねる。

「あのカマド地獄にはいるとどうなるのでしょうか？」

「いやー、見たとおりです。沸騰した湯に入っていていただくと、あなた方の体中の水分も一緒に沸騰して、湯気となるのです。ほら、煙がたなびいているでしょう。あれは、先程やってきたあなたたちの仲間なのれの果てです。でも、水蒸気のままではありません。空気中で湯気が冷やされると水滴となり、再び、カマドの中に落ち、また、沸騰して、湯気となります。それが、未来永劫続きます。これがカマド地獄の宿命なのです」

「湯気やて、わしら水になるんかいな」

「そりゃ、生きものの体の七十パーセント近くは水やいうから、水になるいうても不思議やおまへんで。水になるいうよりは、水の戻ると言う方が正しいんと違いますか」

「これがほんとの水の泡や」

なんとかならないんでしょうかと哀願する一番の整理券を握りしめた男。整理券が手の汗でおれている。

なんともなりませんといきなり紅鬼が泣きついている男を驚づかみにすると、カマドの中へ放り込んだ。じゃぼーんという大きな音が立ち、あっちこっち、助けてくれという叫び声。男があんまり騒ぐものだから、釜のお湯が外で順番に待つ者にも飛びかかる。

「うわー、なにすんねん。ほんまにこの湯熱いで、ほんまもんの熱湯でっせ」

「当たり前やがな、ここは地獄やで。それにしても熱いで。ほら、わしの青い肌が真っ赤になってしもた。この肌の色から言うと、九十九度は間違いない。その点、赤鬼どんは、ええなあ。赤色のままで。ひよっとしたら、お湯が熱うないんと違うんか」

「青鬼はんの皮膚は、温度計かいな。なんぼ、肌の色が変わらんいうたかて、熱いんは一緒ですがな」

釜の外の人間が熱い、熱いと騒いでいるうちに、釜の中の男は、紅鬼がいったとおりにあっという間に蒸気となって消えてしまった。

「さあ、次の人の出番ですよ」

こ、ここにこれだけのお金がありますから許してくださいと尻込みし、替わりに他の奴を押し

出す次の男。

前に押し出された男は、私を、水にして飲んでも、おいしくありませんよと、次の男を前に押し出す。

「いやに、謙虚な方々ですね。下界では、あんなに、俺が、俺がとでしゃばっていたはずなのに。まあ、誰からでも構いませんよ。どうせ、みんな、釜茹でにされるのですから」

と、互いに譲り合っていた二人の男の手を引っ掴むと同時に釜の中に放りこんだ。

またしても、熱湯のしぶきが、今度は二倍分立ち上がり、外で待つ者たちにも津波のように襲い掛かる。

「あっちちちや。紅鬼どんも強引やなあ」

「ここにおるだけで十分、釜茹でになってしまうがな」

紅鬼が、一行の者を次から次へと釜の中へちぎっては投げ、ちぎっては投げていると、釜の湯かげんをみていた子分の鬼が紅鬼の元に駆け寄ってきてこう告げる。

「紅鬼様、あまり続けて人を放り込んだものですから、お湯の温度が下がり、人間が半ゆでになっております」

「青鬼どん、半ゆでやて、なんか気持ち悪おまっせ」

「わしは、半熟たまごがあかんのや。あの中途半端にどろっとしとるやろ。生やったら生、固いんやったら固いとどっちかにしてくれなんたら、口の中に入れた時、歯を強う嚙んだらええんか、そのまま飲み込んだらええんか、迷ってしまうやろ。いっぺん、半熟たまご食べよって、喉詰まらしたことがあるで」

「青鬼どん、あんたが食べるんやおまへんで。あんたが半ゆでにされるんでっせ」

「そやから、半ゆではあかんちゅうことや。どうせやったらすぱっと蒸気になったほうがましやがな」

釜の中の湯の温度が下がっていると聞いた紅鬼は、

「それじゃあ、のれんを下ろしなさい」と部下の鬼に命令し、一行に向かって、

「残念ながら、今日は、カマド地獄はお終いです。お湯をもっと沸かす必要がありますので、まきを買って行って来ます。みなさん、すいませんが、まき代を貸してくれませんか。続きはまきを購入してからです。そのまま待っていてください」

貸すも貸さないも、人々は急いでお金を紅鬼に渡した。紅鬼はそのお金を掴むと子分と一緒にどこかに行ってしまった。

カマドの火は小さくなり、勢いがなくなった。カマド地獄に放り込まれ、湯気となっていた人間たちは、水滴から、元の姿に次々と戻った。

カマド地獄に入ることから難を逃れた者、湯気から人間に生還できた者、互いに抱き合って、無事を喜んでいる。

「なんや、あいつら。急に、昔からの親友だったみたいな行動しよるで。さっきまで、カマド地獄に入る順番を押し付けあっていたのに」

「お湯に入って、これまでの悪行のすべてを水に流したんでっしゃろ。それは、ともかく、紅鬼どんが戻ってくる前に、次の地獄へ行きまひよか」

一行は、これ幸いと、カマド地獄を後にした。

「それにしても、なんやようわからんまま終わってしもうたなあ、カマド地獄は」

「まあ、それにしてもよかったでっせ。なんぼ、結果的に、元の姿の戻れたゆうても、自分が蒸気になるのは勘弁して欲しいですわ。ひょっと、自分の水がすべて集まらんかって、他人の水と混じったりしたらどないなりますねん」

「そりゃあ、他人の顔が自分の体にひっついたりするんやろ。例えば、わしらやったら、顔が赤鬼で体が青鬼のまだら鬼になるんかいな。顔が貧乏くさくて、首から下が背広姿かいな。そりゃあ、この際、その方がよかったかも知れんな」

「いやいや、それでは中途半端ですがな。それにしても、地獄もまきが不足しとるんですな。里山の手入れがゆきとどいとらんのと違いますか」

「今時、カマドにまきをくべるやなんて、珍しいなあ。灯油や電気ではいかんのかいな」

「カマドの方がふっくら炊けるんとちゃいますか」

「わしら、ご飯やないで」

「ご飯いうたら、なんやお腹がすいてきましたな。なんか食いもんか、飲みもんかないんでっしやるか」

## 第八章 金龍地獄

---

これまでの地獄巡りの疲れからか、足取りが重くなってきた赤鬼と青鬼たち一行は、次の地獄へと着いた。

「ここは、何地獄でっしゃろ」

「看板が見えへんし、出迎えの鬼もおらん。ただ、大きな池があるだけや。別に、池から湯気がでたり、白うなってるようにも見えんけどな」

青鬼は、池に近づいて、水に触ってみた。

「どなんんです、青鬼どん」

「別に、普通の水やなあ。いや、なんや知らんけど金色に光るもんが浮いとるで」

「金箔ですか、そりゃ、縁起がよろしおまっせ。ほなけど、その水、飲めまっしゃるか」

「飲んだら飲めるけど、飲まんかったら一生飲めへんで。とにかく、ちょっと飲んでみよ。今まで、飲まず喰わずでここまでやって来たから、腹もへったし、喉も渴いてしもたわ。せめて水でも飲んで腹をおこしたろ。そうせなこの地獄も越せへんで」

そう言うなり、池の水をすくって飲む青鬼。

同様に、喉が渴いて仕方がない一行は、固唾を飲んで、青鬼の様子を伺う。

「どないですねん、青鬼どん」

「う、うまい、こりゃいけるわ」

どれどれと赤鬼も池の水を飲む。

「ほ、ほんまや。こりゃ、うまいわ」

二人の声を聞いた残りの人間たちは、安心して、一斉に池の水を飲み始めた。

「うまいですなあ、いや一地獄でこんない目に会うとはと喜びを口にする。中には、池に入り込んで、足をつける者もいる。

「こりゃ、こりゃ、この池は足湯ではないぞ。みんなが水を飲んでいるのに、足をつけたら汚いかな」

怒った赤鬼が、池から引っ張り出す。掴み出された奴は、体はでかいのに顔はまだ年端もいかぬ子供に見える。

いい年こいて状況も考えずに我儘な行動をするから地獄に落ちるんじやいと叱り付ける青鬼。

あっちにも池にはいる奴がいますよと言いつける若者。

人のことばかり言わんと自分のやったこと考えろと青年に一発かます。

その後で、振り返って見ると、白装束を洗面器代わりに、金箔を掬っている奴らがいる。

「こらこら、お前らも勝手に池の中にはいったらあかんがな。それに、その金箔は、ここの池のものやで。勝手に盗ったら、泥棒や」

二人の腕を掴み、池から放り出すと、今度は年端を超えすぎた年寄りだった。

いい年こいて状況も考えずに我儘な行動をするから地獄に落ちるんじやい、地獄に来てまで強欲げにしてどないすんのやと叱り付ける赤鬼。

今日はいい天気ですねえと横を向いて知らん顔する老人たち。

「どないもこないもならんなこいつら」

「そんな奴らのことより、ええこと考えたで、赤鬼どん」

「なんですかええことやて、青鬼どん」

「このうまい池の水や」

「この池の水がどないかしたんですか」

「この池の水うまいやろ」

「へえ、この池の水うまいおまっせ」

「この水、売ったらええんやがな」

「売るいうてどないして」

「金箔入りの地獄の名水やいうて空のペットボトルに詰め込むんや。どんなに苦しい地獄でも、この水を飲めば元気一杯やいうてな」

「一杯で元気ですか」

「そうや。一杯で、いっぱい元気や」

「そりゃ、おもしろいでんな。ほんでも、わしら地獄の門番がそんな副業してもええんですかいな」

「売り上げの一部を寄付したら閻魔さまも許してくれるんとちゃうか。これからは地獄もいろんなことせな生き残っていかれへんで」

「そやけど、水を詰め込む空のペットボトルやいうても、地獄のどこにありますのん」

「ペットボトルがなかったら、どこからか竹を取ってきて、水筒を作ったらええがな。竹の香りがして、よけいに味が引き立つかも知れん。それに、竹やったら、石油製品やないから、自然にやさしいで。これ、名案や」

さっそく、赤鬼と青鬼は、号令を掛け、一行の半分は山へ竹取りに、半分は池の水汲みに行こうとした。

その時、池の中央から水柱が吹き上がり、怒鳴り声が聞こえてきた。

「こりゃ、こりゃわしの池の水をどうする気や」

一行が見上げると、金色に輝く竜とその竜の頭に跨った金色の鬼がいた。

「あ、あれは、伝説の金鬼どんでっせ」

「ほんま、まばゆいばかりの輝きやなあ。後光やのうて、ほんまに光つとるで、金鬼どんのせいで、この池の中に金箔が浮いとったんか」

「あれ、金鬼どんが、背中搔いてまっせ。おまけに龍も背中搔いてまっせ。背中からきらきら光るもんが落ちてますがな」

「なんや、この池の金箔は、金鬼どんの垢と龍のうろこかいな。げっ、ようけ飲んでしもうたがな」

一行の者全員は、金鬼とその竜の目の前で、げっ、げっ、げっとそこらじゅうに吐きだした。

金鬼は、池のほとりにいる一行に向かって

「せっかく昼寝しとったのに、がやがやとうるさい奴らや。おかげで目が覚めてしもうた。それに、わしを見て、げっ、げっ、げっと吐くとは失礼な奴らじゃ。目が覚めたら腹がへってきた



。よし、順番に、竜のエサにしてくれる。金龍地獄の恐ろしさを思い知れ」

金龍の攻撃から逃れようと、一行は、ひえーとげえーを繰り返しながら走り回るが、どこにも隠れる場所はない。ただひたすら走り回り続ける。

金鬼どん、金鬼どんと声をかける赤鬼と青鬼。

「なんや、こぎたない背広着た奴とぼろぼろの服を着た奴がわしに用か。それなら、最初におまえらから龍に喰わせてやろうか」

「わしら、喰うたかてちいともうもうおまへんで。かえって龍の腹が痛うなるだけや」

「ほんまでっせ。それより、金鬼どん、いや、金鬼さん、いや、金鬼さま、ここで取引しませんか」

「取引てなんの取引や」

「わしら、金鬼さまの池の水知らんで飲んだんやけど、知らんかっただけにうまかったんや」

「こんな水わしは飲んだことがない。わしにとっては風呂と一緒にや」

「そりゃそうや、あんたの垢と龍のうろこがはいっとな知ったら誰が飲めるか」

「何、わしに喧嘩売る気か」

「青鬼どん、黙るとき。ここわ、わしに任せといて。まあまあそんなに怒らんといてな。さっきの話の続きやけど、この水飲んだらうまかったんや。それでなあ、金箔入りの地獄の名水いうて売りに出したらどうかなあと思っとんや。儲けの半分は、金鬼さまの分や」

「こんな水が売れるのか。わしと龍の垢やうろこが浮いとる水が」

「売れる、売れる、売れまっせ。出所知らんかったらなんでもうまいんや。みんなそんなもんや」

「そうか、それなら売ってもいい。わしもこの池の維持費と龍を喰わせていかんで、お金に困っとたんや。なんにもせんでもええんやったら、かまわん」

「いや、金鬼さまにもしてもらわなあかんことがありますねん。この池のうまみの素は、あんたの金色の垢と龍の金色のうろこの破片や。もういっぺん池の中にはいってもらえんやろか」

「そんなことなら、たやすいことや。徒中で起こされたことやし、もう一眠りするか。さあ、金龍、池の中に戻るで」

うおおんという龍の雄たけびとともに、水柱は、だんだんと下がっていき、金鬼と金龍は水の中に消えてしまった。

「さあ、青鬼どん。龍に喰われんまにさっさと行きまひよ」

「あれ、この水売ると違うんか」

「こんな水売れまっかいな。味は確かにうまいけど、味の素は金鬼どんの垢と龍のうろこでっせ。原材料にそんなこと書いとったら売れるわけがおまへん」

「そんなこと書かんかったらええんと違うんか」

「何言うてますねん。最近は、食料品の表示が厳しいて、ちゃんと書いてなかったら商品没収されますがな。消費者も賢こうなって、いかがわしいもんは買いません。それに嘘はいきまへん。嘘ついたら地獄に落ちまっせ」

赤鬼と青鬼がさっさと金龍地獄を後にしたので、残りの人間も慌てて後に従った。

## 第九章 血の池地獄

---

「次は、何地獄かいな」

「入り口で確かパンフレットもろたなあ、赤鬼どん。ポケットの中に入れよったんとちゃうか」

「そや、そや、それ見てみまひょ」

背広のポケットからしわしわになった紙を取り出し、広げる赤鬼。

「まてまて、入り口がここで、最初が、海地獄やったから、ここから、ずっと地獄めぐりをしてきたんや。それで、今さっき、金鬼どんがおったところが金龍地獄やったんから、次は、血の池地獄でっせ」

「血の池地獄かいな。ようやく、メジャーな名の地獄に着いたで」

「ほら、見えてきた。赤い、赤い、血の色をした池が見えてきましたで」

一行は、血の池地獄と書いてある大きな看板の下に立ちどまった。だが、さっきと同じで、血の池地獄の門番は誰もいない。

「なんや、ここも誰もおらんのかいな」

「また、誰かが池の中に潜っとんとちゃうかいな」

血の池の中を眺める一行。

「ほんま、この池赤うおまっせ」

「字のとおり、全部血でできとんかいな。この血は、地獄にきたもんの血とちゃうか」

「そんなあほな。吸血池かいな。それでも、池の水が少のうて、底が見えてまっせ」

「ほんまやなあ。そうや、地獄も血液が不足しとるちゅう話を聞いたことがあるで」

そこに、火の車に乗った朱鬼が駆けつけてきた。

「みなさん、お待たせしました。よく、おいでくださいました。さあ、一列に並んで、ください」

「今から、一体、何をすんのですか」

代表して、赤鬼が尋ねる。

「ここは、見てのとおり、血の池地獄です。その血も減ってしまっせ、見るも無残な状況です。この血の池地獄を維持・存続させるためにも、ぜひとも皆さんの献血が必要なのです。ご理解とご協力をお願いいたします」

「いやー、はじめて、鬼に頼まれたわ。今まで、金出せや、喰ってやるなどろくなこと言われんかったさかい、ほろりと涙が出てきまっせ」

「あほかいな。何、感激しとんや、赤鬼どん。血抜かれるんやで。血抜かれたらふらふらして歩けんようになるやろ。これも地獄の仕置きのひとつや」

そんな赤鬼と青鬼の会話を聞いてか、

「ご心配はありません。ここ血の池血液センターでは、みなさまの健康に十分留意して、献血が行えるようなシステムを行なっております。献血をした後も、快適な地獄の生活が遅れるよう、十分な配慮をしております。また、今回献血していただいた方には、献血カードをお渡しします。この献血カードがあれば、万が一、大怪我などをして、輸血が必要になったときでも、優先し

て血の供給が行われます。今、地獄では、血液が非常に不足しております。重ねて、皆様のご理解とご協力をお願いいたします」

「そこまで、朱鬼どんがいうのなら、献血しましょか」

「そうなあ、自分かていつ、輸血してもらわなあかんようになるかも知れん。みんな、お互いさまや」

一行は、朱鬼の前に一列に並んだ。

「ありがとうございます。それでは、ただ今から、血を抜かさせていただきます。すいませんが、そのまま血の池の中におはいりください」

「池の中には入れて言うとするで。血抜く前に、体中清めるんやろか。まあ、ええわ」

「ほな、はいりまひょ」

温泉にでも入る気分で、血の池に進む一行。最初は、膝が浸かるぐらいだったが、しだいに池の底が深くなり、腰まで血の池にひたってしまった。

「なんや、生暖かい池やな」

「そりゃ、血の池の水は血やから、体温と一緒に温度でっせ」

「あら、なんか足に吸いついとるで」

「青鬼どんもですか。わたしもお腹のところがさっきから妙に引っ張られるんですわ」

「今度は、尻も吸いつかれた」

「わたしは、右手に引っつきよりました。こりゃ、なんですか」

赤鬼が右手をあげると、そこには真っ赤なたわし大のヒルが手の甲にまとわり付いていた。

「なんと、大きなヒルやなあ。献血やいうて、ヒルに血吸わしとんかいな、気持ち悪いやり方やな」

岸から、朱鬼の声が聞こえてくる。

「もう少し、ゆっくり進んでください。そうしないと、ヒルが十分に血を吸い取れませんので」

そんな声にも耳を傾けず、ヒルやヒルやと大騒ぎしながら、急ぎ足で向こう岸にたどり着き、岸辺に倒れこむ一行。

「もう、こりごりや、体中にキスマークがついとるが。このまま、帰ったら、嫁さんに家いれてもらえんがな」

「ヒルから漏れた血が体中について、みんな、赤鬼になってまっせ」

「いや、血抜かれたから、顔は青白鬼や」

「みなさん、ご協力ありがとうございました。おかげで、今日の献血の目標を達成することができました」

知らない間に向こう岸からこちらの岸にやってきた朱鬼が深々と礼を述べた。

「献血に協力するんはええけど、もうちょっとええ方法はないんかいな」

「このやり方だと、体中のいろんな箇所から血を吸い取ることができ、献血者の体の負担も少ないかと思われます」

「そう言えば、なんや、体が軽くなったような気がするわ」

「みなさん、お疲れだと思しますので、どうぞおいしい水をお召し上がりください」

ペットボトルを一人ずつに配る朱鬼。

「こりゃ、サービスええわ。体中から血を抜かれてしもたんで、喉が渴いてきたがな。どれどれ飲ましてもらおう」

「う、うまい、うまい水やなあ。地獄でこんなうまい水飲めるなんて、初めて、いや二度目や」

「うまいけど、なんやこの水、きらきらするもんが浮いてまっせ、青鬼どん」

「ほんまやなあ、なんや、さっき見たような気がする」

「よく、ご存知ですね。この水は、金鬼印の金箔入り金龍水と言いまして、今、さっき発売が決まったばかりの新製品です。地獄で一番うまい水と評判です。献血にご協力していただいたみなさんに少しでも感謝の念をと思いまして、金鬼さんに直々に分けてもらったのです」

「うえー、さっきの金鬼どんと龍の垢とうろこの水かいな」

「ぺっ、ぺっ、ぺっ、ぺっ、こんな水飲めますかいな。さっさと次の地獄へ行きまひょ」

「ありがとうございました。またのご来場をお待ちしています」

## 第十章 竜巻地獄

---

朱鬼の笑顔に見送られ、顔をしかめながら血の池地獄を立ち去る一行。

「なんや、まだ、口の中がおかしいわ。金箔が口の中にひつついてのかんのかいな」

「ほんまですな。ほんでもあの水、売りにだすんでっしゃるか」

「水の正体知らんかったら、うまい水やで。知らぬが地獄や」

「青鬼どん、パンフレットではここが最後の地獄巡りになってまっせ」

「もう、最後かいな。いや、もう地獄も飽きたわ、さっさと終わって地獄の門のそこへ帰らなあかん。それでなんていう地獄や」

「竜巻地獄って紹介してまっせ。ほんでも、ここは、看板もないし、山も池もなんにもない、ただの広い野原でんな」

「ピクニックやないけど、まあ、ここで休んだらええがな。どっこいしょ」

さっきの献血の疲れもあり、一行は、思い思いの場所に座り休憩しはじめた。

「なあ、青鬼どん」

「なんや、赤鬼どん」

「今まで、いろんな地獄を巡ってきて、仲間間の鬼の仕事を見させてもらいましたなあ。へんな奴もおったけど、みんな、それなりに一所懸命やってますがな。そやけど、わたしらの仕事が一番ええのかも知れんまへんな。なんやかていうたかて、青鬼どん、あんたと一緒やから」

「ほんまや。わしらがで一んと地獄の門番しよるから、他の地獄も引き立つんや。この地獄の門に入るということで、悪い奴らも、背筋がぴしっとなるんやからな。はよ、この地獄巡り終わって。あいつらと違ってやらなあかん。そう言えばサラリーマンと放浪者はちゃんと門番勤めとんかいな」

「ちょっとのつもりが長うなっていましたなあ。お土産買うていかなあかん」

「金箔入りの地獄の水はどうでっか」

「それが一番、地獄巡りできつかったわ」

二人して大笑い。

そこに、草原の彼方からなにやら不気味な音が。

「おい、見てみい、赤鬼どん。なんや、向こうの方で砂埃が舞っとるがな」

「砂埃やおまへん、竜巻や、ほんまもんの竜巻でっせ」

「どこぞへ逃げなあかんがな」

座り込んだ一行は、慌てて立ち上がり、尻についた草もはらわず逃げようとするが、どこにも隠れ場所はない。立ち尽くしているうちに、竜巻に巻き込まれてしまった。

「あかん、気分が悪うなってきた。わし、コーヒーカップみたいに回るやつに弱いんや」

「なにアホなこと言うтонですか。遊園地やないですっせ。それより、コーヒーカップというより体がぐるぐる回るからジェットコースターでっせ」

「これはお金いらんのかいな」

「払うも払うわんも、知らん間に竜巻に飲み込まれてまっせ」

「後から、請求書が届くんとちゃうか」

「売りつけ商売かいな。大丈夫、それなら、このまま竜巻に乗って逃げてしまいまひょ」

一行は、体がきりもみ状態のまま、空高く上昇していった。その時、青鬼の懐から財布がすべり落ちた。

「あっ、わしの財布が」

青鬼は慌てて手を伸ばすが、手は空気を掴むのみ。

「しまった。なけなしの金が」

「わたしの財布も落ちてしまいました」

赤鬼もポケットを手で押さえるが、そこはもぬけの殻。

竜巻に巻き込まれた一行の財布が、雨のように地面に吸い込まれていく。

財布～、財布～という声だけが後から追いつがる。

すると、閻魔さまの声が聞こえてきた。

「おまえたち、ようここまで地獄巡りをしてきたな。だが残ったお前たちは、地獄に来るにはまだまだ修行が足りん。生きとったとき、もうちょっと悪いことせんと、鬼もいじめがいがない。もういっぺん下界でやり直して、金をたくさんためて地獄へ来い。今度来た時は、わしが直々に相手してやる。それまでこの財布はわしが預かっておくからな」

「やっぱりただやなかったで」

「ほんでも、もういっぺん地獄来る奴おるんやろか」

閻魔さまの声が終わるや否や、竜巻の風が急に止んだ。空高く上昇し続けていた赤鬼と青鬼たち一行は、今度は、急激に、落下し始めた。

「こ、今度は、落ちていきまっせ。いままで、さんざん持ち上げとったくせに。た、た、助けてくれ～」

「乗せられて、舞い上がったもんが悪いんやろ」

その頃、赤鬼と青鬼に化けさせられたサラリーマンと放浪者。とりあえず、金棒を手にして地獄の門の前に立つ。

「なかなか、赤鬼と青鬼は戻ってきませんなあ」。

放浪者は疲れたようにサラリーマンに話しかける。

「普段から、寝転がって生活してきたから、こうした立ち仕事は苦手なんです。苦手だから放浪者になったのに、地獄に来てまで、なんで仕事しないとイケないんやろか。よっぽど生きとったとき、悪いことしたんやろか。もう、足が棒になりますなあ」

「大丈夫ですよ。お疲れになったのなら、そこの金棒によりかかったらいいですよ。わたしは、営業でお得意様周りばかりしていましたから、こうして立っているのはいいんですが、反対に、じっとしているのが辛いですよ」

「それでも、久しぶりにこうして人間と話ができてうれしいなあ」と放浪者。

「そうですか、私なんか、話ばかり、それも心にもないおせいじばかり」

「何を言うてますねん。心にもないことやから口から言葉がでるんと違えますか。真心こもった言葉は、決して口から出ませんわ。また、出せませんわ」

「そりゃ、ええこと言われますなあ。当たってますわ。いや、これはおせいじと違いまっせ。そんなこと気にしていたらしゃべられませんか」

「それにしても、わしら、なんかしゃべり方まで鬼たちに似てきましたな」

「ほんまでんなあ。こうして、鬼の面をつけ、鬼の服を着て、おまけに金棒まで持ったらすっかり、いい気分、いや、鬼気分ですわ」

「心まで鬼になってしもたんやろか。前は、サラリーマンのころしか持っていませんでしたのに」

「心まで鬼になった方が楽でっせ。人はなんにでもなれるちゅうことや」

「なんにでもなれるということは、もともと、自分なんか無いのと違えますか。たまたま、サラリーマンになったり、放浪者になったりするだけのことですかいな」

「そう、たまたまや。鬼もたまたま。人間もたまたま。ボールもたまたま。いや、ひとつ、たまが多かったですな」

「でも、どうせ何かになれるのやったら、ない自分やけど、ない自分なりに好きなものになりたいですなあ」

「好きなものやいうたら、こうして人間から鬼になったのも好きなもののひとつかいな」

「そう考えたら、楽しくなりますなあ」

あれこれと鬼になったばかりの新人たちがしゃべっていると、向こうから、あの赤鬼と青鬼を小さくした鬼がやってくるではないか。

「パパ、パパ、まだ、お仕事なの、もう帰ろうよ」

赤鬼の子供が足に纏わりつく。

「とうちゃん、そろそろ、仕事終わりだろ。かあちゃんが、迎えに行っ来て来いというから来たんだ」

青鬼の子供が続けてしゃべる。

「でも、パパ、少し、小さくなったんじゃない」

赤鬼の子供が、心配そうな顔で、見上げる。

「そうだな、赤鬼おじさんだけでなく、とうちゃんも細くなった気がする」

青鬼の子供は、にせ赤鬼とにせ青鬼の全身を不思議そうに見つめる。

「いやー、ちょっと、昨夜は、色々あって、少し疲れがでたんとちゃうか、なあ、青鬼どん」

「そうや、そうや、赤鬼どん。昨日は、大変やったなあ。地獄に来た奴の中に、途中の三途の川で、落ち込んだ奴がおって、そいつを助けるために、人工呼吸やら救急車をよぶやら、病院で見舞いしたり、関係者として地獄警察から事情聴取を受けたりと、寝る暇もなく、一晩中、働きまわったんや」

「ふーん、なんで、地獄に来た奴を助けなканのや」

子供の鬼たちが素直な疑問を発する。

「ほんまやなあ、なんで助けたんやろか、青鬼どん」

「それはな、確かに、生きとった時、悪いことをしおった人間を懲らしめるのが地獄やけど、わしら鬼の心まで地獄やないで。困っとる奴がおったら、助けてやるのが鬼の心ちゅうもんや。そうせんかったら、わしら鬼までが、閻魔さまの前で裁きを受けなあかんようになる」

「そうや、そうや、青鬼どん。さすが、年の功や、ええこと言うなあ。そんな、あんたがなんで、地獄に落ちたんや」

「ほっといてくれ。言うんは簡単や。どう生きるかが大事なんや」

「なんか、パパと青鬼おじさん、さっきから、変なことばかり言ってるけど、お仕事終わったんでしょ。早く、家に帰って、キャッチボールでもしようよ」

「俺も、早く帰らないとかあちゃんに、怒られるから。仕事やめて、早く帰ろうよ」

「ちょ、ちょ、ちょっと待ってたあ、青鬼どん、青鬼どん、ちょっとこっちへ」

「なんや、赤鬼どん」

二人のにせ鬼たちは、地獄の門の大黒柱の陰で、ひそひそ話を始めた。

「なあ、青鬼どん。わしら、このまま、あの鬼の子供たちと一緒に、鬼の家に行ってもええんやろか」

「いやー、わしもそれで迷とんや。次の引継ぎ地獄の門番が来るまで、待つてなあかんのと違うんか。もし、勝手に持ち場離れたら、ほんまもんの赤鬼と青鬼から大目玉くらうんと違うか」

「よう言うわ。生きてる時は、職場も、家庭も放棄したくせに。何を、急に、律儀なことを」

「いやー、仕事を止めたり、家から出たんは、自分の意思からや。人に頼まれたことを途中でほっぽりだすんは、わしの性にあわん」

「あんたの性格なんかどっちでもいいですわ。それより、このまま、あの赤鬼と青鬼の家に行ったら、わたしらの正体がばれるんと違いまっか。それを心配しとんですわ」

「そりゃ、そうや、あの赤鬼と青鬼が地獄巡りから帰ってきたら、いっぺんで正体がばれるがな



」

にせの赤鬼と青鬼が、自分たちの行く末についてあれこれ迷っていると、そこへ、自分たちを助けた黄鬼が疲れた様子でやってきた。

「いやー、赤鬼どんに青鬼どん。なんや、まだ、門番しとるんかいな。もう五時がきたで。今日の仕事も終りや。わしの仕事も終わったさかい、あんたらも、さっさとしまいで仕事しまいや。そうや、あんたら、知っとるか。さっき、わしが連れてきた人間どもが、なんや、竜巻地獄に巻き込まれて、全員、人間界に落ちてしもたらしいで。一所懸命仕事して地獄の中に放り込んだのに、すべて水の泡や。三途の川に落ちて、助けたサラリーマンと貧乏くさい奴も、一緒らしいで。まあ、閻魔さまの命令やから仕方がないけどなあ。それはそれとして、明日も忙しいけど、頑張ろうな。ほな、さいなら」

黄鬼は、しゃべりたいだけしゃべると、自分の家のほうに帰ってしまった。

「にせ青鬼どん、聞いたかいな」

「その、にせはやめとくれ。にせ赤鬼どん」

「あんたも言うとするがな。そんなことより、あのほんまもんの赤鬼と青鬼が、わしらの替わりに人間界へ落ちた言うてはりましたで」

「ほんまかいな。いやー、ほんまかも知れんな。なんや、帰りが遅いなあと思うとったんや」

「ほんなら、わしらどうなるんやろか、青鬼どん」

「どないも、こないも、ほんまもんの赤鬼と青鬼が人間界に行った以上、わしらは、地獄で赤鬼、青鬼として生きていかなあかんやろう」

「鬼に化けて生きていけるんやろか」

「何言うとするんや、赤鬼どん。赤鬼どんも、昔は、サラリーマンやったんやろ。サラリーマンは、紙切れ一枚で、どんな職場にでも変わらなあかんし、どんな遠いところへでも転勤せなあかんのや。鬼になるんも、仕事と思うたら、なんとかなるで」

「仕事の鬼やのうて、鬼の仕事になるんでっか。ええこと言いまんな。ほんでも、途中で、仕事リタイアした人から、サラリーマンの心得を教えてもらうとは思わなかったわ」

「心得だけは、一人前やったんけどなあ」

「生き方は、半人前や」

「ほっといてくれ。わしは、ラーメンとチャーハンが半分ずつの二つの味が楽しめる、お得な半ちゃんラーメンが好きやったんや」

「半人前の意味が違いまんがな。とにかく、わたしら、三途の川に落ち、鬼に拾われ、鬼の代わりに地獄の門番をして、今度は鬼の父親になるんでっか」

「そや、わしらは、今日から、鬼として生きていくんや。人間世界で、迷惑掛けたから、その分、あの赤鬼や青鬼の家族のために、精一杯頑張るで。もう、仕事は、投げ出したりせん。赤鬼どん、あんたも頑張りや。もう一遍人生やり直すで」

「なんや、いやに、気合がはいとりますな、青鬼どん。地獄で、もう一遍人生やり直すというのはなんか変な気分やけど、まあ、これも地獄に来てまでもサラリーマンの運命やと思うて頑張りますわ」

とうとう我慢できなくなったのか、そこに赤鬼と青鬼の子供がじれたようにやってきた。

「パパ、青鬼おじさんと何、話しての。早く、帰ろうよ」

「ほんまや、とうちゃん。黄鬼おじさんは仕事やめてさっさと家に帰ったよ。赤鬼おじさんも仕事やめて帰ろうよ」

「わかった、わかった。ほな、そういうことで、なんや、訳がわからんけど、青鬼どん、明日からよろしく」

「こちらこそ。赤鬼どん、よろしく」

二人の鬼は、鬼の子供に手を引かれながら、新しい生活へと向かって行った。

## 第十二章 ほんまもんの地獄（最終章）

---

どすーん、どすーん。

大地を揺るがす音がふたつ。

「あいたたたった、あいたたたった」

あたり一面に響き渡る悲鳴がふたつ。

「青鬼どん、無事でっか」

「ああ、なんとか息しとるで、赤鬼どんはどうや」

「お尻がえらい痛うおます。真っ赤になってますがな」

「そりゃ、赤鬼どんの肌の色や。わしは青うなってるがな」

「それは青鬼どんの蒙古斑や。それにしてもここはどこでっしゃろ」

「なんや、広い野原に、ぎょうさん木が生えとるがな。誰や、あいつ。長椅子に人間が寝とるがな」

「地獄にしては、長閑なとこやなあ。ハトにエサやっとする人間もおりませ。なんやしらんけど、向こうから、年寄りの人間が犬を連れて歩いてきよる。ちょっと聞いてみましょか」

「ちょっと待ち。なんや、どっかで聞いたことがある風景やな。そうや、サラリーマンと放浪者が言うとった公園と違うか」

「ほんまですわ、あそこの公衆便所の片隅にダンボールが大事そうに積み重ねられてますわ」

「向かいの木には、ベルトがひっかかてるがな。下界、人間界に落ちてしもたんかいな。閻魔さんが言うとったとおりのや」

「ほんま、閻魔さん、嘘言いまへんな」

「何、感心してんねん」

「これからどないします、青鬼どん」

「どないもこないもないけど、わしら、生きとんのかいな」

「生きとんのか死んどるのわかりしまへんけど、こうして青鬼どんと話してませ。生きとんのと違いまっか。まさか、二人とも同時に、同じ夢見てる訳はないでしょう」

「そやなあ、地獄でも生きとったし、こうして人間界へ落ちてきても生きとるし、なんや不思議な気持ちやなあ」

「そんなに言われたら、そうでんなあ。いろんな地獄巡りで、空気や土や水になった奴も生きとるいうたら生きとると言うてはりましたわ。なんや、わしら鬼も人間もどこでも生きなあかんちゅうことですか」

「そう言う事や。まあ、とにかく、また地獄へ戻らなあかんがな。嫁はんも子供も仕事も待ってるがな」

「地獄へ戻ったらまたぎょうさんお金がいりませ」

「ほな、これから働いて金ためよか」

「そうですね。わたしは、この背広がありますよって、これからサラリーマンでもやっていますわ」

「わしは、この公園に住んで、道に落ちとるもんでも拾うてみるわ。ええもんが見つかるかもしれんし、環境美化にもつながる。エコややエコや。時代に遅れんよう、ついていかなあかんがな。それに、一石二鳥や」

「地獄へ戻れるようになったら、またお会いしまひょ」。

「そうやな、それまで頑張ろ。金がたまったら、公園へ来いや。その時は、わしがベルトに首を引っ掛けて、赤鬼どんがハトのエサ喰うんやで」